
僕は理麻・俺も理麻＊ラブコメ版＊

琉兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は理麻・俺も理麻*ラブコメ版*

【Nコード】

N0375U

【作者名】

琉兎

【あらすじ】

僕の名前は篠宮理麻。どこにでもいる普通の高校二年生。俺は理麻。一応族の『skyscraper』のリーダー。

これは二人・・・否、一人の理麻の物語。

一応、王道のつもりです・・・が、作者の妄想入り混じる作品です。で・・・あと主人公総受けにしたいのでラブよりコメディーが強いかもです。まあ理麻君の日常、楽しんでください。不定期更新

です！ R15の可能性皆無になったと思うのでR15タグ外しました。不良高校生のお話ですが、喧嘩などの描写はありません。タダ話の都合上その他の残酷表現がありますのでご注意ください。

いちおうBLですが、恋愛要素重視というよりはコメディー重視となっています。恋愛版はこれが完結後、それぞれキャラごとに分けて連載開始したいと思います。

僕・理麻「て・・・転校・・・？」（前書き）

タイトルは仮なのでいいのが浮かんたら変更します。

あ、お読みくださった方でこんなタイトルどう？っていうのありましたらおよせください。（人任せはやめなさい）（殴）・・・はい（

僕・理麻「て・・・転校・・・？」

その日、一人の少年が両親に呼ばれた。自室にいた少年は、これから公立の高校へと登校しようとする準備をしていたが、こんな朝に自分を両親が呼ぶのも珍しいと思った少年は準備の手を止め、一回にあるダイニングに向かった。

「何の用？」

「理麻ちゃん！-」

「うわぁ・・・な・・・何、お母さん。」

いきなり母親が抱きついてきた。ちゃん付けで呼ぶのはいつものことなのだが・・・。それよりもなぜかちよつと泣いてるような声なのはなぜなんだろう。

「理麻ちゃん-。」

「理奈。理麻が困ってるじゃないか。」

こういうとき父親がこういうのもいつものこと。なのに、何か今日はおかしいよ。

「理麻、実は仕事の都合でフランスに行かなきゃいけなくなった。」

「え・・・フランス？」

「そうなの・・・それで、その出発が今日なの！-」

「ええ！？なんでそんな急に・・・。」

「実は・・・もう二週間前くらいにはきまってたんだが・・・。」

そう言っつて父親はいまだに理麻に抱きついてる母親を見る。

「理奈が言わないでって言い張ってな。すまない。」

「え．．．お母さん．．．。」

「だって、理麻ちゃんと離れなきゃいけないと思うと、私．．私．．．いやー！ー！！！」

「んぎゃああ．．おかあさ．．くるしい．．．。って．．．

やつは僕はついてけないんだ．．．。」

「理麻は日本（にっぽん）に残ってやりたいことあるんだろ？」

「ていうか．．外国じゃ．．．ちよつと．．．。」

無理だよ．．生きてけない．．．。

「そう思っ、理麻には悪いが、今日から転校してもらうことにした。全寮制の男子校だから．．まあ、友達とかには困らないと思うが．．．。」

「て．．．転校？」

「やつぱ、できたばかりの友達とはなれちゃうのいや？」

「やじゃ．．ないけど．．大丈夫なの？僕編入試験とかしてないけど．．．。」

「それは問題ない。理麻の成績書でしたら問題なく通った。理事長とはちよつと顔なじみだからな。頑張れるか？」

「うん。大丈夫。」

ううん、ぜんぜんだいじょうぶじゃない。けど心配かけたくないからここは『うん』っていう。

「じゃ、これ新しく通う碧條学園の制服よ。荷物とかは後で届けるわ。今日中に届くようにするから、理麻ちゃんは安心してね。着替えたなら私達が空港行くついでに一緒に行きましょう。」

「わかった。じゃ、着替えてくるね。」

ぎゅっと、不安いっぱいなのを押し殺すように胸の前で力一杯抱き寄せた理麻はそのまま自室に戻り新しい制服に袖を通したのだった。

登場人物（前書き）

今から後に出てくる主な登場人物。

また増えたらそのたびにこのページは更新します。

このページは少なからずネタばれを含んでおります。嫌だと思われる方はスルーして次にお進みください。ここは作者のためのメモみたいなものなので。

登場人物

- 1、身長・体重・血液型
- 2、クラス
- 3、所属してる族・族の時の通り名
- 4、性格
- 5、その他

篠宮理麻

しのみやりま

- 1、160センチ・49キロ・AB型
- 2、2 - D
- 3、『skyscraper』 摩天楼 のリーダー・通り名は『
せんや閃夜』
- 4、無自覚二重人格。族の時と日常で切り替わってしまう。という
か昼は平凡・天然・鈍感。夜はまるつきり正反対の不良。本人はその
自覚はなく、昼間の時の人格は夜の事は覚えてない。（夜の方は
覚えてる。）昼は結構人見知りする。

- 5、実家は篠宮カンパニーという世界にも名高い会社である。両親
には溺愛されていて、家継がなくても良いと言われる。あと、
見かけによらず大食いで、驚くほどよく食べる。あと超甘党。運動
神経皆無な昼に対し、夜になると喧嘩最強。今までも無敗を貫いて
いる。昼と夜ではすべてが正反対になるらしい。頭はよくIQは1
70以上は確実にあるらしい。明るいハニ・ブラウン、ややオレン
ジっぽい瞳。

一之瀬玲治

いちのせれいじ

- 1、178センチ・58キロ・B型
- 2、2 - D
- 3、『skyscraper』の副リーダー・通り名は『
たつき梟』

4、明るくて気さく。誰にでも好かれるような性格。族にいる時もそんな感じ。

5、理麻とは幼馴染で、理麻が二重人格だとする数少ない人物たちの一人。昼と夜、どちらの理麻も受け入れ、変わらず接する。彼もまた家が金持ち。玲治の親と理麻の親は親友。理麻と玲治ももちろん親友。というか、実は玲治は理麻が好きだったりする。その事に気がついたのはつい最近で、まだそれを打ち明けようとは思っていない。昼も夜も理麻に振り回されっぱなし。茶髪を肩まで伸ばした黒目。

あかつきけい
暁圭吾

1、碧條学園理事長

2、189センチ・68キロ・B型

3、特になし

4、取つても温厚で、誰へだてなく接する。ちょっと天然入ってるように見えて、実はかなりのしつかり者。

5、玲治とは伯父甥の関係。歳は26と若い。黒い髪を後ろで束ね、黒縁伊達眼鏡かけてる。見た目インテリ。（実際もインテリだけど）実は以前最強の不良とおそれられていたことがある。理麻（閃夜）を族の世界に誘い込んだのはこいつだったりする。

つうひはやう
椎堂隼斗

1、182センチ・63キロ・A型

2、3-A・生徒会長

3、『twilight』の副リーダー。通り名は『鬼神^{きしん}』

4、真面目なのか不良なのかよくわからない人物。生徒会長の仕事をまじめにしつつ、族に顔出して、喧嘩したりもする。副リーダーだが、実質は彼がリーダーみたいなものである。が、訳ありで副になっている。『skyscraper』と『twilight』は対立しているため、『閃夜』である理麻を探しているらしい。根は

優しい。

5、髪の毛は金髪。だが、決して染めてるわけではなく、彼がハーフだからである。母親がアメリカ人。目も若干青い。理麻と学校内で知り合うが、『閃夜』とは気がついてはいないようだが……。

えんどうあゆむ
遠藤歩

1、179センチ・59キロ・O型

2、3 - A・生徒会副会長

3、所属なし

4、普通は副会長がしっかりしてるのが多いが、こいつはふまじめつか、学校生活の8割を寝て過ごしてる。でも副会長。族にはどこにも所属してない。ただ起きてる時の洞察力は鋭く、校則違反者にはたとえ寝てても反応する不思議な才能？を持つ。ふまじめな姿を知っているのは生徒会メンバーだけの極秘事項。表向きはまじめ鬼副会長で通している。

5、隼斗とは親友。学校の自分が使う机（生徒会室の）には常時枕を用意してある。学校は寝るところ。でも授業は建前でまじめに受けてる。黒髪、黒眼。赤ぶちの伊達眼鏡を頭にのつけてる。たまーにかけてる時もある。

いしかわゆうじ
石川悠吾

1、171センチ・50キロ・A型

2、2 - B・生徒会書記兼会計

3、『twilight』の幹部。通り名は『銀豹』ぎんひょう

4、書記と会計を兼任してる苦勞人。生徒会が運営できてるのは彼のおかげ。また『twilight』の幹部としておもに情報収集をしている。几帳面で、明るい性格。

5、喧嘩はそんなに強くないので、おもに情報収集してる。理麻について頭いいかもしれない。赤毛に黒眼。両耳に青いピアスつけて

る。

仙道彰
せんどうあきひろ

1、177センチ・58キロ・B型

2、2-D

3、『t w i l i g h t』のリーダー。通り名は『冷帝』
れいでい

4、つんとしたクールな生徒。結構なぞ多い。あまり口開かず澄ましている。結構口悪い。

5、理麻と寮の部屋が同室。周りには知られていないが、実は『t w i l i g h t』のリーダー。青い髪に青いカラコン入りの瞳。(元の色は両方とも黒)なんやかんやで理麻のこと気にかたり世話したりしてる。ある意味玲治ポジション寄りの人物。うるさいの苦手。閃夜より臆のほうが好きw

清水健斗
しみずけんと

1、182センチ・60キロ・O型

2、3-C

3、所属なし

4、寮長。正しくは寮管理総責任者。だが長いのでみんな寮長と言っている。バスケット部長兼任。面倒見よくいい先輩。明るくて元気いっぱい。スキンシップ激しいけど、決して下心とかなく素。

5、試合などで邪魔にならないでいどのショートヘア。色は黒っぽいこげ茶。ちよつと童顔気味の黒眼。

橘弥生
たちばなやよい

1、163センチ・52キロ・A型

2、2-D担任・教科は数学。

3、所属なし

4、理麻の担任。ちよつとヘタレ気味な先生。よく生徒にからかわれてる。生徒も悪気はなく最後は笑いあってる。そういう性格のた

め生徒からは結構好かれている。身長低いのが悩み。実は昔は理麻同様人見知りだった。

5、黒い前わけの髪、やや茶色っぽい瞳。瞳は若干たれ目。まだ新任で、歳は25歳。生徒に紛れ込んでも違和感ない感じもある。

登場人物（後書き）

こんな感じで・・・

ほんと、通り名考えるだけで死にそうになりました。

僕・理麻「がっこ・・・おっきな・・・」(前書き)

理麻君は可愛く書いてくつもりです。

可愛い男の子動かしてやってくたまらない。
↑
はい、この小説の作者は変人です。

僕・理麻「がっこ・・・おっきいな・・・」

通学用の新しい紺色のかばんを持って、篠宮理麻は自家用車の外車から降りた。その隣には母親の篠宮理奈も降り立った。

「ここが・・・今日から僕が通う学校？」

「そうよ。ほんとに大丈夫？理事長さんの部屋まで、ママついてこっか？」

「いいよ・・・一人で大丈夫。それに飛行機の時間なるでしょ？遅れちゃだめだからね？」

「うう・・・理麻ちゃん・・・約束よ。必ず何かあったりしたら、メール頂戴。お電話でもいいわ。さびしくなってもよ？無理はくれぐれもしちゃダメよ。わかった？あ、ママが作ったウサギちゃん持つてく？」

そういつて理奈は車からおっきなウサギのぬいぐるみ（お手製）を取り出そうとする。

「いらないよお！！僕もう高2なんだから！！いつまでも子供じゃないよ！！ほら、お父さんも待ってるし、いつてらっしゃい。」

「ううー理麻ちゃんー！！」

ほんとに泣きながら最後に力強く抱きしめて、母親は車に乗り込み、両親を載せた車は空港へと向かって行った。

一人残った理麻は、改めて今日から通う全寮制男子高校：碧條学園を見た。といってもそこにそびえ立つ巨大なそれでいて豪勢なもんが見えるだけだが。

「おつきい……前通つてた公立とは比べ物になんないなあ……
。今日からここに通うのか……。ふあ……。なんか緊張する。え
っと……。まずは理事長さんに挨拶だね……。理事長さんか……。
。怖くないやいいな。」

そう思いつつ理麻は門のわきにあつた機械に先ほど母親に渡された
通行許可証を通して門を開けて中に入った。まず目に入つたのは並
木道。前に一本。両脇に分かれるように一本ずつある。その分かれ
道の最初のところに、公園によくあるような案内看板があつた。学
校全体を記したものらしいが……。

「体育館が東西南北四つ？校舎も3つつ……。寮って……。うは
あ……。」

もう言葉に言い表せないほど広いその敷地に、理麻は看板の前で思
わず感嘆の声を上げた。とりあえず、理事長室がある学校管理塔へ
と向かった。なぜ棟ではなく塔なのか、それはその建物が本当に円
柱型の塔だったからだ。

「今の時代塔って珍しいなあ……。えっと……。理事長室は此処
の最上階だよな。」

理麻は最上階に行くためのエレベーターに乗り込み最上階のボタン
を押した。

僕・理麻「がっこ・・・おっきいな・・・」(後書き)

次回理事長さんと理麻ちゃんの会話。

学園の描写はすみません。とてつもなく広い事だけ頭においれください。

僕・理麻「理……理事長さん……!？」（前書き）

うん、いろんな意味で大丈夫かこの人って感じの理事長さん。

w インテリ設定だけど……キャラがちょっと……あ、いい人です

僕・理麻「理……理事長さん……!？」

最上階は、とても豪華だった。下にはクリーム色みたいなそんな感じのいろのふんわりじゅうたん。美術館みたいなきらびやかでいてどこか落ち着いた感じの壁と天井。ところどころに小さな可愛いシャンデリアが下がって、高そうな花がこれまた高そうな花瓶にいられてあった。理麻はそんなこうけいにみとれつつ、理事長室へと続くフロアーを歩いていく。すると受付のようなところがあった。そこには受付の女の人が出て、理麻に気がついたのかにつこりと笑いかけていた。だが理麻はそれを見て身を固くする。鼓動が次第に早まり、不安いっぱいになる。

「あ……あの……その……。」

「はい、理事長にどのような御用件でしょうか？」

「あの……僕、今日から……転校してきた……篠宮……理麻です……。」

「篠宮様……はい、承っております。どうぞ、こちらからお入りください。奥へ進んでいただいて、右側のお部屋が理事長の書斎となっております。」

「は……はい……。」

ぺこつとおじぎして理麻は先へと進んだ。なぜこんなたどたどしい口調になってしまうかというと、理麻は人見知り激しいのだ。どうも生まれつき人と話すのが苦手らしく、あまり話したことがない人や初対面の人とはさっきの様な話し方になってしまう。

言われた通り奥へと進み、右に回って木製の頑丈そうな両開きのドアの前に立つ。とんとんと軽くノックしたら、中から声がしたので、理麻は恐る恐る入った。

中もまたすみずみまでお金がかかってますって感じの部屋だった。ワインレッド色のじゅうたん、茶色い大きなデスク。黒い革張りのいすに座ってる人が、理事長なんだろう。何かの書類に目を通している。黒ぶちの眼鏡をかけていても頭よさそう。うん、仕事できそうって感じのひとだ。するといきなりその理事長は立ちあがった。おかげで理麻の心臓は飛び出しそうになった。そして理事長はそのまま理麻のほうに近づいてくる。そして、理麻はいきなり抱きしめられた。

「ふえ．．．．．ええ．．．．．ええええ！？」

「．．．．．おかしいな、いつもなら此处でげんこつか回し蹴りが来るのに、どんな心境の変化なのかな、『閃夜^{せんや}』。」

「え．．．．．。」

閃夜ってなに．．．。人の名前？絵．．．じゃ．．．それ僕じゃない．．．間違ってますよお．．．。

「あの．．．僕．．．ちが．．．閃夜．．．じゃな．．．。」

「え．．．？だって篠宮理麻でしょ？」

それは確かに僕．．．．．え．．．？

「確かに．．．僕．．．理麻です．．．けど．．．違う．．．です．．．。」

すると理事長は僕から離れた。ほっとしてたらずいっと顔が近付いてきた。至近距離で顔を見つめられる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・篠宮理麻君？」

「は・・・・・・・・。」

「篠宮家って・・・双子とかいないよね？」

「一人っ子・・・・・・・・です・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・閃夜ってほんとに知らない？」

「しり・・・・・・・・ませ・・・・・・・・ん・・・・・・・・。」

「そっか。そういうことね、我が甥っ子が言ってたのは・・・・

ごめんよ、いきなり驚かせたね。篠宮君、ま、そこ座って。紅茶でも飲むかい？」

こくつと、理麻はうなづいた。とりあえずもう精一杯だ。白いふつかふかのソファに座りながら視線を理事長に向ける。

「そういえば、一麻さんが、君は人見知りするって言ってたっけ。ごめん、無理させちゃったかな？」

フルフルと今度は横に顔を振る。一麻さんというのは理麻の父親の名前だ。

「無理しなくていいから、受け答えもそれでいいし。砂糖いる？」

「・・・・・・・・三つ・・・・・・・・。」

「み・・・・・・・・？あはは、甘党？」

「（こくん）・・・・・・・・。」

「ミルクもいるでいいかな？」

「（こくこく）。」

「はいどーぞ。」

「ありがとうございます・・・・・・・・。」

理麻に紅茶を渡した理事長は、自らも白いふんわりしたソファに腰を下ろした。

「じゃ、あらためて篠宮理麻君。ようこそ、碧條学園へ。僕が此処の学園の理事長、曉圭吾です。さて、学園の説明は、一麻さんから大体聞いてるかな？」

「（こくり）。」

「それで、何か質問したいこととかある？」

「（ふるふる）。」

「ま、君の成績とか見る限り、此処でも十分すぎるほどやっていけると思うから、頑張つて。その性格じゃ、なかなか大変かもしれないけど、僕も一麻さんに頼まれてるから、なんかあつたら僕に言ってきてね。力になれるなら協力するからね。」

「は．．．い．．．。」

「んー．．．とりあえず．．．僕はこれ以上ないかな．．．。寮のことは授業終わって放課後、寮長に聞いてね。寮長は3年生の、えつと．．．ああ、清水君か。清水君はいい寮長さんだから、安心して。はい、これ君の学生証。なくすといろいろ大変だから注意してね。」

「はい．．．。」

「それで此処の生活すべてが賄えるから。お財布とか、身分証明、寮の力ギにもなってるから。じゃ、そろそろ授業になるし、その前に一回職員室行つて、担任．．．2-Dは橘先生ね。その先生と一緒に教室行くことになるかな。」

「はい．．．ありがとうございました．．．。あの．．．紅茶、美味しかったです．．．。」

「飲みたくなつたらまたおいで。」

「（こくん）。」

出て行こうとした理麻を理事長が呼びとめた。再び近くまで寄ってきてまた抱きつかれるのか！と思った理麻だったが、違った。理事長は自分が掛けていたメガネをはずすと、そつと理麻に掛けたの

だった。しかしくらくらすることはなかった。どうやらこれは伊達メガネというものらしい。

「あの……。」

「かけてて。そのままじゃ、いろいろ不安だから。それは、君が此処で安心して過ごせるおまじないにかかっているからね。寮の自分の部屋以外ではずしちやだめだよ。」

「でも……。」

「いいから、それは篠宮君にしか効かないおまじないなんだよ。僕は別になくても何の支障もないからさ。」

「は……い……。あの……しつれいします……。」

なれないメガネに戸惑いつつ理麻は理事長室を後にして、職員室のある校舎へと向かった。

僕・理麻「理・・・理事長さん・・・!？」（後書き）

いきなりのハグ!!

うは・・・ちっこいこがギュってされてるのが好きなんです。すっぱり腕の中に収まっちゃってるのが・・・たまんない・・・。
すみません、何書いてるんでしょうね。理事長も理麻の秘密を知ってます。

甥っ子のせいだね。甥っ子はもうちょっとしたら出てきます。

僕・理麻「せんせ・・・ちっちゃい・・・」(前書き)

登場人物のページに寮長と担任を追加しました。興味のある方はご覧ください。

そして今回は理麻と担任、橘先生の会話ですかね。

僕・理麻「せんせ．．．ちっちゃい．．．」

学園管理塔から、理麻は職員室のある校舎へと向かった。校舎は全部で三つあり一つは1〜3年の教室や食堂、図書館などがある普通棟。二つ目は音楽室、美術室、科学室などがある特別棟。そして三つ目が職員室や、校長室、会議室や応接室、事務室がある教員棟だ。それぞれが渡り廊下でつながっている。理麻は教員棟の二階にある職員室についた。ドアのところに、先生の席が記された図があったので、理麻は先ほど理事長が言っていた、橘先生を探してみた。

「えっと．．．橘先生．．．橘先生．．．は．．．。あ．．．あった．．．窓側から二つ目のブースの．．．右から三番目。よし．．．失礼します．．．。」「

小声でなんとかそういつつ、理麻は職員室に入った。もうすぐホームRという時間なので、先生たちの姿はまばらだ。橘先生がいるかどうか不安になった理麻だったが、先ほど確認した席に、しっかり座ってる人を見て、安心した。

「あ．．．あの．．．橘先生．．．ですか．．．？」「
「んー？あ、君が転入生？」

振り返ったその人は間違いなく橘先生だった。フルネームは橘弥生^{たちはなやよい}だ。そんな橘先生はおでこに人差し指を当てて何かを思い出そうと
していた。

「えっと．．．えっと．．．篠宮君？でいいよね？」「
「は．．．い。よろしくおねがいします．．．。」「
「．．．．．．．．．．．．緊張してる？」

「そ．．．そういう．．．わけじゃないです．．．。」

「．．．．．ひょっとして、人見知り激しい感じかなあ？」

「はい．．．。」

「そっか、そっか。解るよその気持ち。初めての人とか、知らない人とか、何かわからないけど、話ずらいよね。俺もそうだったんだ。人見知りってやつ。今はもうそんなの無いけどね。人見知りしてたら、教師やってられないからさ。篠宮君も今に大丈夫になるからね。ま、うちのクラスは皆いい子ばかりだから、大丈夫大丈夫！じゃ、教室行こうか。」

「はい．．．。」

椅子から立ち上がった先生を見て理麻はちょっと驚いた。

ぼ．．．僕と身長そんな変わんない．．．．．。

たしかに橘は理麻よりちょっとだけ高いだけのようだった。

先生、可愛いかも．．．．．。言えないけどね．．．。

「篠宮君、おいってっちゃうよ？」

「は．．．はい．．．。」

たしかに、傍から見ると同い年の二人が並んで歩いているようにしか見えないのだった。

僕・理麻「せんせ・・・ちっちゃい・・・」(後書き)

あれ・・・うん・・・橘先生、こんなキャラになっちゃった・・・。
ほんとは強面の先生にしようかと思ってたんですけど・・・ま、い
つか。

S i d e ? 「いい歳してはしゃいでんなよ、え、転入生？」（前書き）

ちよつと理麻から視点を別にします。

やっと出せた！！もう達成感でいっぱいです。

Side? 「いい歳してはしゃいでんなよ、え、転入生?」

俺が教室につくのはいつもHR開始五分前。それでも別にどうってことないだろ。間に合えばよし。でも、今日の教室はいつもとは少し違った。まあ、いつもがやがやしてんのは変わんないんだけど・・・今日はそれ以上に騒がしい。・・・あ、そういや、昨日橘のやつが転入生来るよー・・・とか言ってたな。転入生ねえ・・・って、こんな時期に? もうすぐゴールデンウィークっていう時期に? どんなタイミングだよ・・・。つか、転入生ごときでそんなに騒ぐなよ。いい歳して・・・。

内心そう思いつつ、彼は自分の席である窓際、後ろから二番目の席に腰を下ろした。学園指定の紺色のかばんを無造作に机の上に投げ出す。赤い携帯を取り出し、何気なくいじくる。それでもざわめく周りの声は聞こえたまま。

はあ・・・退屈。やっぱ俺もあいつと同じ公立行けばよかったかなあ・・・。こんなとこいたって、ひまなだけだし。やっぱあいついないとなあ・・・。何してんだろうな今頃。あれからあんま連絡してないし・・・夜も会わないしなあ・・・。今度連絡取ってみっかな・・・。

すると、全国共通。あのお決まりのチャイムが鳴る。そしてその後、担任の橘が入ってきた。相変わらずちっさい。

「おはようございますー! あはは・・・みんなもう早くしろって顔してるねー。んー・・・あんまりせかすのもかわいそうな気もするんだけどな・・・。」

何一人で言っただろうか……。可愛いそうって誰が？もしかして転入生がか？なんでかわいそう？ま、いいや、って……。メール十件も誰だ！？

自分のところに来ていたメールの量に驚いてる彼をよそに、転入生が姿を現した。周りの騒がしさがざわめきに変わる。

「え……。つと……。し……。篠宮……。理麻です……。よろしくおねがいします……。」

ぴく……

十件ものメールと格闘していた男の手が止まった。削除しますか？の画面から教室の前に立つ転入生を見る。

まさか……。いやそんなはずない……。此処にいるわけがない……。だってあいつはいま、公立の高校に通ってるはず……。でも……。篠宮ってたしかにいつてたか？

黒板には、橘が書いたのだろう篠宮理麻の字が白く黒板にある。

間違いない……。のか……

そして、教卓の横にちょこんとたつその転入生を見て、一之瀬玲治いちのせれいじは思わず携帯を落つことしそうになった。

間違いない。メガネをかけてるのがやや気になるが、だが本当に間

違いない。でもなぜ・・・なんでここに？

いるはずのない幼馴染の姿がそこにあった。

S i d e ? 「いい歳してはしゃいでんなよ、え、転入生？」（後書き）

やっと出てきたね、玲治。

彼がいなきゃ、始まんないんですこの話は。

影の主人公って言うてもいいキャラ。さ、理麻に振り回されるんだ
！！なんて・・・。

僕・理麻「ちょっとは安心していいのかなあ？」（前書き）

理麻視点に戻ります。

やっとな普通に喋る理麻君が書けました・・・かな？

僕・理麻「ちょっとは安心していいのかなあ？」

「んー．．．えっとじゃーあ．．．篠宮君、あの一番後ろの席ね。」

「は．．．い。」

橘先生に言われた通り、窓側の一番後ろの席が開いていた。理麻はそこに向かった。それにしてもなんか視線感じるのはなんだろうなあ．．．。やっぱメガネ似合わないのかなあ．．．。でも、理事長さんはかけててって言うてたし．．．。うーん．．．ま、いっかなあ．．．。

疑問を覚えつつ、理麻は席に座った。橘先生が2・3個今日の予定や諸連絡を話してHRは終わった。一時間目はなんだっけかなと、理麻がかばんを開けようとした時だった。突然、前の席の生徒が理麻のほうを振り向いた。

「なあ、なんでメガネかけてんの？」

「え．．．．．な．．．んで．．．って．．．目．．．悪いか．．．ら．．．。」

「嘘つけ、両方1・2の癖に。イメチェン？」

「な．．．で．．．．？」

なんでこの人は僕のことこんな知ってる風に言うんだろ．．．．．。

「あれ、俺のことわかってない？ちょっとショック受けんだけど．．．。十数年の付き合いだろうに．．．、理麻。」

そう呼ばれて、じつと顔を見て、そして思い出す。中学卒業以来の再会だ。

「?????.....あ.....も.....しかして.....玲治?え.....玲治?玲治?」

「お前.....気づくの遅すぎ。俺そんなに変わってないだろ?」
「髪の毛変えたじゃん。」

「染めただけだろ。お前こそ、何そのメガネ。」

「な.....なんか、理事長さんが掛けてって。かけてれば安全に過ごせるからって.....」

「んまあ.....確かに、理麻は顔隠した方がいいかもないろんな意味で。」

「どゆこと?」

「そういうとこ。」

「?????」

訳わからないよ、玲治。解らずこてんと首を傾げても目の前の玲治はただ笑っただけだ。教えてくれてもいいのにい。

「で、なんでお前、此处にいんだよ。学校は?」

「転入してきたじゃん。」

「なんで転入してきてんの?」

「親がどっちもフランス行っちゃって.....僕はこっちでやりたいことあったから.....それで、お父さんが理事長さんと顔見知りだから、転入させてもらえたんだよ。そっか、玲治が通ってる高校ってここだったんだ。」

「知らなかったのか。」

「ん.....ごめんね。」

「別にいいけど。って、フランス!??」

「うん、多分仕事だと思うよ。」

「なるほどなあ。つか、まだ人見知りには健在か．．．。」

「そう．．．。」

「ま、わかんない事あったら聞けよ。」

「うん、玲治がいて安心した。」

「んだそりゃ。」

「えへ．．．。」

うん、これなら頑張れそうだよおとうさん、おかあさん。

僕・理麻「ちよつとは安心していいのかなあ？」（後書き）

やっぱ書きやすいキャラはサクサク書けます。さて・・・次どうしましようかね。

僕・理麻「はう・・・最近抱きつかれるの多いなあ・・・」(前書き)

登場人物ページにはないキャラがどーんと、前に出てきますが、
今回のキャラは登場人物ページに、載せることは(いまのところ)な
いかと・・・。

僕・理麻「はう・・・最近抱きつかれるの多いなあ・・・」

碧條学園での午前の授業を受けている理麻は内心ホツとしていた。授業内容は確かに濃いものの、そんなについていけないほどではないからだ。これなら何とかやっていけそうだと思っている。まあ、理麻は元来成績優秀の生徒なので、そんな心配無用なのだが・・・。

そして、午前の授業が終わり、昼休みとなった。理麻がノート類を机の中にしまっていると、前の席の玲治が振り返ってきた。

「理麻、昼食いに食堂行くだろ？」

「うん！」

「なんか元気だな？」

「ご飯！」

「昔っからよく食ってたもんな。」

食堂へ向かうと、2人がたちあがったときだった。教室の前のほうから2人組が近づいてきた。

「玲治ー！ごはん行こうぜー！！」

と、玲治を訪ねてきたのにもかかわらず、その二人組のうちの一人がなぜか理麻に後ろから抱きついた。突然のことで、理麻はすっぴりとその生徒の腕の中に埋もれた。

「・・・え・・・ふえ・・・！？」

「紫音、いきなり抱きつくのだからって言ったでしょ？」

抱きついてないもう一人があきれながら言う。理麻はわけがわからず腕の中であたふたしている。

「転入生、ぎゅー！！ってか、玲治って転入生と知り合いだったんだな。」

「幼馴染だよ。つか、理麻離せよ。」

「癖なんだから仕方ないだろー！」

「はう……。」

「理麻大丈夫か？」

「ん……も……だめかも……。」

「ったく。」

理麻のギブアップを聞いて、玲治は理麻とその生徒を離れた。

「うー。もうちょっとぎゅーしてたかった。ま、いつか。悪いな、こうしちゃうの癖なんだよ俺の。俺、井上紫音いのうえしおん。よろしくー。」

「癖もいい加減直したら？僕は入野悠いののはるかっていうんだ。さっきはこの馬鹿がごめんね？」

「馬鹿っていうなー！！」

「馬鹿、ちび。」

「ちびじゃない、転入生のほうがちびっこいぞー！！」

「こらー！」

「れ……れいじ……。」

解放された理麻はこの現状についていけず、くいくいと玲治の制服を引っ張った。

「大丈夫だつて。こいつらいつもこうなんだ。でも、本気じゃないからさ。いい奴らだし……ちょっと変わってるけど。だからそんな心配すんなつて。」

「ん．．．わかつてるけど．．．。」

「ね、理麻君だっけ？理麻君って、もしかして人見知りするタイプ？」

「え．．．。」

「そ。昔っからこんなかんじ。とくに初めて会うやつとかにはこんなだな。な、理麻。」

「（こくん）」

「そっかー。じゃ、紫音のやっぱり驚かせすぎちゃったよね。ごめんね。でも、人見知りって大変だよな。僕の従兄弟にもさ、居るからよくわかるよ。」

「人見知りかー。俺には縁ないなーそういうのー。」

「だろうな。」

「でも！俺らもう初対面じゃなくなったよな！」

「は？」

「今度は何を言い出す気だ？」

「だって俺もう、理麻の友達になったんだから、仲良しだろ？人見知りする必要もないだろ！」

「とも．．．だち．．．？」

「あ、僕も僕も。これからよろしくね、理麻君。」

「．．．．．あり．．．がと．．．．。」

2人の言葉に、理麻はふんわりと笑って答えたのだった。

僕・理麻「はう・・・最近抱きつかれるの多いなあ・・・」(後書き)

やはりこういう友達は理麻には必要だろうと考えて出した二人です。

あくまで友達の設定なので、恋愛には発展させません。

僕・理麻「おいしいご飯・・・うまうま。」（前書き）

理麻視点が一番書きやすいです。ただそれだけですけど。

お気に入り登録してくださった方、誠にありがとうございます。

僕・理麻「おいしいご飯・・・うまうま。」

僕と玲治そして紫音君と悠君は、そろって食堂に向かった。食堂
つて、これまたすごいんだ。まず広さ。全校生徒がすっぽり収まっ
て、なおかつ席が余るって玲治が言ってたから、相当広い事がわか
る。次に豪華さ。この学校いろんなところにお金かけてるけど、此
処もすごい。ふつかふかのじゅうたん。一流レストランにあるよう
なテーブルセット。そしてお決まりになってしまってるシャンデリ
ア。此処ほんとに学校なのかなあって思う。僕らは食券の券売機に
向かった。あ、此処でも食券なんだ。なんか此処だけ浮いてるよ・
・。玲治たちは慣れた手つきで食券を買ってる。なるほど、学生証
をかざせばメニューを選べるんだ。

理麻は、数多くあるメニューの中から食べたいものを選んでいった。

選び終わった四人はそれをカウンターに持っていく、あいているテ
ーブルに腰かけた。理麻の横に玲治、向かいに紫音と悠だ。ご飯が
運ばれてくるまで四人はたわいもない話をし（といっても理麻はあ
まり会話に入ってはいないけど）、十数分後昼食が運ばれてきて、
理麻以外の三人は驚いた。

明らかに四人前以上ある料理の数。玲治はA定食、紫音は月見そば、
悠は親子丼。では、このオムライスと、カレーと、カうどんと、B
定食は・・・・・・。

「いただきます・・・・・・。」

理麻のだった。

「お前、よくそんなにいつも食うよな。」

「はぐはぐ・・・もぐもぐ・・・。」

「理麻すげー。俺よりチビなのに、どこに入ってくんだー？」

「ぱくぱく・・・お・・・なか・・・。」

「そりゃそうだよ。」

「理麻は大食いだもんな。そんなに食ってんのおつきくなんねーけど。」

「玲治・・・一言余分。」

ふうとオムライスをほおばりながら、理麻がほほを膨らませた。

「午後の授業何が残ってるー？」

「んー・・・なんだっけ？」

「理科・・・あと・・・世界史・・・。」

「理麻よく覚えてんだなー！！」

「つか、転入してきたばかりの理麻が覚えてんのに、お前が覚えてねーのはおかしくねーか？」

「俺そついうの苦手ー！暗記とかもつと苦手ー！！」

「だろうな。・・・そういや、理麻、寮の部屋とかわかんのか？」

「授業・・・終わったら・・・寮長さんのところ行くの。」

「寮長つて、清水先輩か。わかるのか？」

「（ふるふる）」

「んじゃ、俺と一緒に会いに行こうぜ！！！！」

紫音が張り切って言った。

「え・・・でも・・・。」

「俺今日は放課後暇だし、玲治は何か用あんだろ？」

「ああ、わりいな理麻。どうしても外せないんだ。紫音となら大丈

夫だろ？」

「うん……。」

「清水先輩も怖い人じゃねーし、ある意味紫音っぱい感じだから。理麻もすぐになれるさ。紫音、あんまり麻をビビらすようなことすんなよ？」

「わかってるー！！じゃ、授業終わったら会いに行こうぜ！」
「うん。」

どんなひとなのかなあ……清水先輩って。

それにしても……此処のご飯……おいしい……。

僕・理麻「おいしいご飯・・・うまうま。」（後書き）

いっぱい食べるのはいいことです。ま、琉兎は小食なんですけどww

次は寮長の清水先輩かな、と・・・。

僕・理麻「寮も・・・おつきいな・・・頭痛いよ」(前書き)

やっと寮のほうに話が移りました。

紫音が暴走気味ですかね・・・いえ、元気ハツラツなだけです！

僕・理麻「寮も・・・おつきいな・・・首痛いよ」

放課後になり、理麻は紫音と共に寮長である清水先輩こと清水健人を訪ねて三年生の教室へと向かった。知らない人ばかりでびくびく理麻を紫音が引つ張っていく。そして二人は3-Cの教室に着いた。

「すいませーん！清水先輩ー！！」

「んー？って、なんだ2年の井上じゃん。どうかしたかー？まさかまた部屋のなんか壊したんじゃ・・・。」

そついいつつ教室から現れたのが清水先輩である。焦げ茶のショートヘアで、人の良さそうな人だ。

「壊してないですって！！ほら、家のクラスに転入生来るって聞いてますよね、つれてきましたー！！」

「ふうあー！！」

そついつて紫音がいきなり理麻を前に押しだした。今まで、紫音のやや後ろにいた理麻は一気に清水の真ん前に出てくる形になった。

「ああ！そうだったそうだった。」

「わすれてたんですかー！？」

「もうすぐインターハイだろ？試合近いとバタバタしててな。えつと、じゃまず自己紹介ね。俺が寮の責任者の清水健人っていうんだ。」

「し・・・篠宮理麻です。よろしく・・・お願いします・・・。」

「理麻、人見知りなんだよねー！だから先輩虐めちゃダメっすよー！！」

「俺よりお前に迷惑してんじゃないのか？」

「ひつでー!!」

「ははは、じゃ篠宮君。井上なんかほつといて寮に行こうか。」

「・・・はい。」

「ほつとくなんてひどいぞ!!俺も寮帰るんですー!!それに俺と理麻友達なんだし、理麻、俺の事ほつといていかないよな!!」

「え・・・え・・・?」

「こら、困ってるだろ。」

ぽかっと、軽く清水先輩が紫音君の頭小突いた。オーバーに紫音君は頭抱えてうずくまる。

「いつてー!!先輩が暴力振るつたー!!理麻、気をつけるよー!!」

「大丈夫、井上以外には暴力振るわないから。」

「ひで!!理麻ー!!」

先輩から逃げるように僕に縋ってきた紫音君。え・・・僕どうすればいいの？

「つて、これじゃ夜になるよ・・・じゃ、いこうか?」

「はい・・・。」

「よーし!寮行こうぜー!」

「井上が仕切るなよ。」

三人そろって、僕達は学園の敷地内にある寮に向かった。

その寮がまたすごいんだ。都会にある高級マンション顔負けの、超高層マンションが建ってた。見あげると首が痛くなってきたよ。

「一階が管理室、後エレベーターホールと自販機が数台あるかな。管理室は基本夜間は俺がいるけど、あんま遅い時間は自分の部屋帰ってるからね。」

「っていうか、俺先輩が此処にいるの見たことないっすけど……！」

「なんか言ったかな、井上？……ま、とりあえず入って入って。中で寮の説明するから。井上は帰っていいぞ。」

「やだ……。俺もいる！」

「……そうだね。井上ももう一回説明受けたほうがいいかもね。」

先輩がなんか思い出しながらそういつてるけど……紫音君なにしたの？

三人は管理室に入った。きちんと片づけられた室内はそんなに広くもなく、かと言ってせまくもない。清水がお茶を入れて、寮の説明が始まった。

僕・理麻「寮も・・・おつきいな・・・頭痛いよ」(後書き)

紫音は寮を壊す常習犯なのですwブラックリスト入り。

あと寮長は全生徒の名前を覚えてるといふ素晴らしい記憶力の持ち主なのです。

僕・理麻「僕の同室者って・・・どんな人？」（前書き）

やっと寮の話になってきましたね。

同室者はまだ出ませんw次話くらいですかね。

僕・理麻「僕と同室者って・・・どんな人？」

「まず、基本玄関は学生証で開け閉めするよ。機械があるからそれにかざせば情報読み取って開くからね。寮の部屋のドアも同じ要領で開くから。まあ、同室生に中から開けてもらう事も出来るから。」

「そついや、理麻の部屋って何号室何すか？」

「そつえば、言ってなかったつけね・・・えっと、ちよつと待ってね。篠宮君・・・篠宮君・・・はーつと・・・。」

清水はつくえから全部屋割りの名簿を取り出し、理麻の名前を探していく。

「あ、あつたあつた。篠宮君は2427号室ね。同室生は・・・仙道彰。」

「せつ・・・仙道——！？」

その名前に過剰に反応したのは、理麻ではなく紫音だった。

「しお・・・ん・・・くん・・・？」

「寮長！！なんで、そんな部屋割りなんですかー！！あの部屋はまづいつしょ！特に理麻はあいつと一緒にいるだけで死んじやうかも知んないー！」

え・・・一緒にいるだけで死んじやうって・・・その人どんな人！？

「俺に言わないで。部屋割りは理事長と校長が決めてるんだから。それじゃなくても空き部屋ない今の状況で、部屋があっただけでもましな方なんだぞ？」

「でも……やばい、やばすぎるよ……!!理麻——!!」
「ふぁ……ちょ……また……。」

また抱きついてくる紫音君。苦しいよぉ……うぬぬ……。
誰か助けて……!

「そっだ、玲治。玲治に知らせなきゃ!!理麻、俺玲治に電話して
くるからそこにいろよ……!!」

「え……え……?」

そっいつて携帯片手に管理室の外に飛び出してく紫音君。え……
一人にしないでよぉ……。どうすればいいのぉ?

「仙道か……。確かに、篠宮君には酷っちゃあ酷かもなぁ……。」

清水も一人でブツブツ言っている。

え……。その人ほんとに何者なの?ううう……。こわいよぉ……。

ずずずと理麻はお茶をすすった。煎れ方がうまいのか、はたまた
お茶が良いものなのかその両方なのか、美味しいお茶だった。でも
内心はびくびく。お茶ってリラックス効果あるんじゃないかってっけ
かなぁ……。びくびく。

「そっいえば、井上が一之瀬呼んでくるって言ってたのは……
知り合い?」

「……。おさな……。なじみです……。」

「そっか。ならなんとかなるかな。じゃ、説明の続きしようか。
戻ってくるまで。」

その後、紫音君と息切らした玲治が来るまで、清水先輩は簡単に残りの説明をしてくれた。なんとか覚えられたかな……。

「理麻！お前……よりもよってあいつとか！！寮長！どういうことですか！！」

「だから、俺に言わないでって。説明はもう終わったから、部屋に連れてってあげて。俺これからバスケ部の方に顔出さなきゃいけないから。篠宮君、なんかあったり困ったことになったり、部屋の不備を見つけたら俺に言って来てね。」

「はい。」

「じゃ、あとよろしく！」

そいつって、寮長さんは颯爽と部活に行っちゃったんだ。

「なんだってあいつとなんだよ。部屋割り考えた奴でできやがれ。」

「理麻——！！」

「ふっわぁ……。」

「だから抱きつくんじゃないやねーよ紫音。はぁ……ま、しかたねーか。理麻、なんかされたらすぐにおれのところに来いよ。隣の隣だからな。」

「なんかされたら……って……なに……？」

怖いよ……なんでみんなそんな風に言うのお？

僕は一抹以上の不安を抱えて、僕がこれから暮らすことになる寮の部屋に向かった。あ、僕の荷物はもう部屋に運ばれてるって寮長さんがいつてったんだ。

僕・理麻「僕の同室者って・・・どんな人？」（後書き）

やっと仙道の名前が出てきましたね。

周りの反応にびくびくしっぱなしの理麻くん。次回はいよいよ仙道が出てきますね。

僕・理麻「玲治も・・・怖いよぉ・・・」(前書き)

まだまだ続く理麻の寮の話。

やっとしゃべります、仙道がw

僕・理麻「玲治も・・・怖いよ・・・」

ということで、僕は玲治と一緒に僕の寮の部屋、2427号室に玲治と二人で向かった。紫音君はおなからすいたからって寮のわきにある売店に行っちゃった。一緒にいてくれるんじゃないの？

で、エレベーターで上に登って、とうとう理麻は2427号室に来た。いや、来てしまったと言った方がいいのかもしれない。

「あ、最上階は生徒会の専用階だから行っちゃだめだからな。一般生徒立ち入り禁止だし。まあ、生徒会に許可もらったらいいんだけど、めったにないからなそんなの。」

「うん・・・。ねえ・・・僕の同室の人って・・・どんな人？」

「・・・正直、あんまり理麻には関わらせたくない奴。ほら、理麻のよこの席空いてたろ？」

「うん・・・。」

「そこがそいつの席。席まで隣かよ。つたぐげんなったの。」

「ごめ・・・なさい？」

「あ、理麻に言っただけだし。仙道に言っただけだし。」

「そう・・・。」

「あんまり嫌だったら俺と部屋交換するか？俺の同室生わりといい奴だし、仙道に比べたらずっとましだぞ？」

「ううん・・・玲治にそんなに迷惑かけらんないよ。それに・・・僕もこのままじゃ駄目だなんて思うから・・・がんばってみる。」

頑張っただけかならないんだけど・・・と玲治は内心思った。

「でも、理麻じゃあいつとは絶対に無理だと思っただよなあ・・・。
話した瞬間倒れたりするかもだし・・・。」

「どんなひとなのそれ・・・。」

「お前ら、邪魔だそこどけよ。何だって俺の部屋の前で突っ立ってんだ、あ？」

後ろから聞こえた第三者の声に、玲治は顔をしかめ、理麻は盛大に驚いてしまった。振り向きもせず、すでに振り向いていた玲治の後ろに隠れた。

「此処に用があるからに決まってんだろ？大体ここは今日からお前だけの部屋じゃねーんだよ。」

いつもよりどすの利いた声で玲治が話す。いつもとは違う玲治に理麻はびくびくし始めて、思わず玲治の背中に縋りつく。おでこをぴったり玲治の背中につけてなるべく小さくなっているため、相手の顔が見えない。

「そっぴや・・・。ふーん、じゃ、そいつが・・・ねえ。」

玲治越しに見られている気がして理麻の心臓はさらに早く鼓動した。

「ま、俺にはどうでもいいけど。五月蠅くしたら殺す。」

「やってみ？お前じゃ無理だね。」

「此処でやっても良いんだぜ？」

「やってみる。」

「・・・・・・ふん、いつ見ても憎たらしい面だぜ。」

「そりゃどうも。」

「今度会ったらぶん殴る。」

「じゃ、会わないように気をつけねーとな。」

ばたんと音がして寮のドアが閉まった。それでもまだ理麻は玲治の後ろから出てこれないわけで……。

「理麻、大丈夫か？つかそれじゃ大丈夫じゃないだろ？」

「れ……いじ……怖い……。」

（やべ……ついいつもの夜の調子でしゃべっちゃまった。こっちの理麻じゃなれてねーもんなあ。半分俺のせい？ちよっと傷つくわ……。）

「ごめん。怖がらせたな。でも、もう大丈夫だからな？」

「ん……あの人が、僕とおんなじ部屋の人？」

「ああ……ほんとに今のうちだぞ？」

「でも……もう決まったことだし……僕だけが寮の部屋好き勝手に変えるなんてずるいから……。大丈夫だよ……。」

「理麻……。俺、あっちの二つ隣の部屋だからな。なんかあったらいつでも来いよ？……っやっぱ俺も中まで行こうか？」

「いい。玲治来たら……。怖いよ……。」

（相当怖がられてんな……。せつかくこっちの理麻の前じゃ優しい玲治で貫いて来てたのにあのくそ仙道め……。今度会ったらぜったいばこす。）

「わかった。夕飯一緒に食いに行こうな。荷ほどきひと段落したら連絡くれよ？」

「連絡……。無理……。」

「そか……。お前携帯音痴だったな。」

理麻は現代っ子に珍しい携帯全く使えないという特技(?)を持つ

ているのだ。おかげで一応持つてる携帯も今はたぶん寮の部屋の段ボールの中に入ってるだろう。携帯って言葉知ってるか - と言いたくなるが理麻だから仕方がない。

「・・・なら終わったら俺の部屋来いよ。それでいいだろ？」

「うん、わかった。じゃ、あとでね。」

「ああ・・・。」

2427号室の中に消えていった理麻を心配顔で玲治は見送った。

「ばれなきゃいいけどな・・・理麻の正体・・・。あ・・・眼鏡外すなって言うの忘れた・・・。ま、大丈夫だろ・・・うん・・・。」

そういつて一人納得した玲治もまた自分の部屋に戻っていった。

部屋に入ってすぐに理麻が彰に口を手で封じられドアに押しつけられていたとも知らずに・・・。

僕・理麻「玲治も・・・怖いよ・・・」(後書き)

あ、微妙に理麻君ピンチですね。

玲治気がつかず!!!理麻の心臓が止まってしまわないかが心配です。

僕・理麻「だからっ……人違いだよぉ……」(前書き)

理麻君と彰の初がらみ。

理麻君に気が休まる時は来るんでしょうか………

僕・理麻「だからっ……人違いだよぉ……」

部屋に入ってドアが閉まって、そのすぐ先に同室生がいた。きれいな青い髪の毛に同じような色の瞳。カラーコンタクトって言うのかな。背も高いし体格良さそうだし……力じゃ絶対にかないません。そんな同室生は引き返そうと思った僕の肩を掴んで、音がたないようにドアに押しつけて口に手をあてがって封じて……。怖いよ……。助けて……。玲治……。

「お前のその顔……。どつかで見たことあんだよな。」

知らない知らない。僕はあつたことないもん……。うう……。口が封じられてるから言えないよぉ……。ううん、あいてたとしても言えるかわかんないよ……。

僕は精一杯、否定の意味を込めて首を思いっきりよこに振った。ぶんぶん音が出そうなくらい。

「ちがうつつーのか？……。俺の思い違い……。？ま、閃夜学校来るわけねーか。」

また閃夜？だからそれ僕じゃないよぉ……。今日二回目……。そんなにそっくりなのかなぁ……。僕と閃夜って人。

彰はそういうとぱっと理麻から手を離して奥へといってしまった。ようやく解放され、ほっとした理麻は靴を脱いで奥へと向かった。玄関スペースを抜けてドアを開けるとそこはリビングスペースのようだった。奥には小さなキッチンもあってそこで料理したりする人もいるらしい。そして両脇に個人スペースがあって、さらに真正面

の一番奥にはリビングスペースからのみ出入りできるベランダがある。お風呂やトイレは玄関スペースの両脇にある。彰はリビングスペースのソファにもたれかかって携帯をいじってた。

どうしよ・・・どっちが僕の部屋・・・？聞かなきゃだめだよね・・・勝手に入ってもし僕の部屋じゃない方だったら・・・怖そう・・・でも・・・話しかけるのも怖いよお・・・うええええ・・・。

理麻はそれでも勇気を振り絞って聞くことに決めた。

「あ・・・あの・・・。」

「あ？」

「（びくう・・・）僕の部屋・・・どっちですか・・・？」

「・・・左。」

「ありがとう・・・。」

もう敬語入り混じったり変な言葉づかいだったが、それでも聞くことができて大変安心した理麻は、さささと逃げるように左側の部屋に入った。確かにそっちの部屋は理麻の部屋のように、開封されていない段ボールが積み上げられていた。簡易のシングルベットに勉強机。たんにクロゼットがある使い勝手良さそうな部屋だった。一人にはちょうどいいくらいの広さである。

「さつと・・・とりあえず、簡単に片づけて・・・明日とかすぐ使いそうなものだけだしちゃお・・・。」

理麻はさつそく段ボールの封を開けて片付けを始めた。

どかつ

ばたばたばた・・・

とさどさとさ

どす

んっ

「うわああああっ!?!」

いきなり僕は段ボールに押しつぶされちゃった。うう・・・重いよ
お・・・って、一人じゃ抜け出せないよお・・・。助けて-!!!

なんて思ってたなら、部屋のドアが開いて、同室生の仙道君がいたわけです。ふわあ・・・なんか怒ってるう?怖いよ、睨まないでよ・・・。

「五月蠅い。つか、何やってんだよお前。」

「あ・・・え・・・つと・・・。た・・・すけてくださ・・・。
」

「はあ・・・独りで片付けもできねーのか?」

「ごめ・・・なさ・・・。」

「ったく。」

やや呆れながら、それでも仙道君は僕の上にのしかかった段ボールをどかしてくれた。あれ・・・そんな悪い人でもなさそう?

「何見てんだよ。」

「え・・・あ・・・っ・・・。」

ついじーっとみてたら、睨まれちゃいました。特に意味はないんだけどなあ・・・。

「これどこだ?」

これとは理麻にのしかかった段ボールのことだ。

「え・・・あの・・・そっち・・・。」

そういつて僕は何となく空いていたベットと壁の間のスペースをさす。あそこなら邪魔じゃないかなって思っで・・・でも指図するみたいでいいのかなあ・・・。

なんて思っでいた理麻だっが、彰はその指し示したところに段ボールを置いていった。

「お前・・・見た目通り。」

「??」

「ひ弱すぎ。あと、うるさくすんな。」

「（こくこく）。」

そっいいのこし、彰は理麻の部屋から出ていった。ぱたんと、静かにドアが閉まった。

「怖い人なのかそうじゃないのか・・・わかんないよあ・・・。でも・・・助けてくれたんだよね・・・。そんな悪い人じゃないんだよね・・・。あ、かたづけしないと・・・玲治待たせちゃう・・・。」

理麻はあまりうるさくならないように注意しながら、せかせかと片付けていったのだった。

まあ、ときどき物を落したり、つまずいて転んだり、騒がしい事はそうだったのだが・・・。彰も最初は何度もなりこもつかと思っが、次第にあきらめがついてしまい、早々に部屋から出ていったのだった。

「にしても・・・お母さんめ・・・。ウサギちゃんは入れなかったけど・・・でつかいアザラシのぬいぐるみ入れるなんてえ・・・。男子高校生がぬいぐるみなんて持たないよ普通。」

けっきょく、その巨大アザラシのぬいぐるみは、置き場所がなく理麻のベットに置かれるのだった。

僕・理麻「だからっ・・・人違いだよ・・・」(後書き)

あざらしをぎゅーーーーっしてねてる理麻君を生で見たい

げふっげふっ・・・なんでもないです。ごめんなさい。

俺・理麻「つかありえねーだろなんだあの部屋割り」(前書き)

やっと思書けましたよw w

やば・・・まじ楽しいって思います!!
更新とまらないですどうしようw w

俺・理麻「つかありえねーだろなんだあの部屋割り」

夜。

ほとんどの国民が寝静まるそんな時間帯に、少年が静まり返った街を歩いていて。そのとき、少年の持つ黒い携帯電話が、パーカーのポケットの中で震えた。電話だった。少年はそれを取り出し、電話にでる。

「もしもし？」

『あ、やっぱそっちになつて抜け出したんだな？ 昼理麻じゃ携帯出ねーもんな。』

「お前か……。今すぐ来い。」

『わかった。今どこ？』

「……。……。二丁目のコンビニの角。」

『あそこな。わかった。』

その数分後、私服姿の電話の相手玲治がやってきた。

「ひつさしぶり、理麻。いやいまは閃夜か？」

「ああ。昼の俺が公立の宿題に追われて、なかなか寝てくんねーんだからな。転校して宿題少なくなつて、早く寝てくれたんだよ。」

「あれ、寝なくてもチェンジできるんだろ？」

「出来るが……。めんどい。あの母親も何考えてんだか。いきなり転校だなんてふざけやがつて……。」

「まあまあ。結構自由な学校だろ？ 宿題もそんなねーし。理麻もう終わらせただろ？」

「8時前に寝たからな。寝付きが良いのは助かる。スムーズにチェ

ンジできるからな。」

「二重人格の自覚ないのは大変だな。」

「どうにかしてくれ。」

「むちゃいわないで。」

「性格の事じゃねーよ。なんだ、あの部屋。」

「広くていい部屋だろ？」

その言葉を聞いて、理麻は玲治に蹴りを入れた。

「そうじゃねーよ。不備だらけだ。なんだって、あの野郎がいんだ。危うくばれかけた……。」

「ばれかけたんだ。」

「まあ、昼の俺がうまくかわしたがな。」

「理麻が？」

「首思いつきりよこに振って全否定した。」

「頑張ったな - 理麻。明日飴玉やるな。」

再び蹴ろうとしたが、今度は玲治が上にジャンプしてよけた。むかついたから着地した瞬間狙って、足踏んでやった。

「俺に言うな。俺は物はくわねーよ。」

「その分理麻が食うんだよな！。そのちっさい身体のどこに入ってくんだか。」

「お前が無駄にでかいんだよ。縮ますぞ？」

「あはは、まじでかんべんして。で、族の方はどうする？」

「しばし表立って行動は起こすな。あっちも何もしてこねーんだしな。」

「そうみんなに伝えとく。でも、あの理麻が族のリーダーやってるなんて、言われなきゃ分かんねーよ。閃夜って神出鬼没だしな。」

といつても、それは少し違うのだ。理麻は特に神出鬼没でもなんでもない。ただその容姿ゆえにリーダーとは認識されにくいだけなのである。じつしつ、『sky scraper』のリーダーは玲治である。臯ではないかという噂が有力となっている。臯は副リーダーなのだが……。

「あいつにばれたら厄介だな。ま、それは昼次第か……。ばれてもつぶせばいいしな。」

「たのもしいで。……あ、帰ったら宿題見せてくね？」

「だから俺に言うなつての。あいつは俺の時の事は覚えてねーんだからな。」

「そうだったそうだった。なーんかそれも不便だよな。ま、覚えてたら覚えてたで、理麻には刺激強いもんな。」

「俺を年齢制限あるみたいに言うな。」

「R18？」

「なんでだ馬鹿め。」

昼は人見知り激しい気弱な少年。夜は真逆の強気不良少年。

それが篠宮理麻なのであった。理麻は二重人格であるのだが、それを昼間の理麻は知らないのだ。知っているのは夜の理麻である。閃夜と玲治を含む数少ない人間だけである。

俺・理麻「つかありえねーだろなんだあの部屋割り」（後書き）

玲治は理麻を昼理麻・夜理麻で一応わけてはいますが、同じと考え
てます。

ついでに、昼理麻は携帯など機械音痴ですが、夜理麻はバリバリ使
います。なので、一応持つてる携帯は夜理麻専用となっていてアド
レスもほぼ族関係w

あとは登場人物紹介通りですね。

僕・理麻「しんにゅうせーかんげいかいつてなあに？」（前書き）

王道目指してるので・・・このネタは必要かと・・・。

にしても、彰のキャラのイメージがつかめてません。はい・・・。

理麻とどう絡ませようか・・・クールな不良・・・なのに・・・そんな感じしないようになってしまってます・・・。

僕・理麻「しんにゅうせーかんげいかいつてなあに？」

理麻が転入して来て一週間ほどがたったとある火曜日。その朝のホームルーム
HRの内容は、今度の土曜日にある新入生歓迎会である。

「つて・・・なに・・・。」

小さい声で呟いたつもりだったが、前の席の玲治には聞こえていたらしい。振り返って説明してくれた。

「毎年この時期になるとな、新入生・・・まあ今年の一年の歓迎会やんだよ。公立でもあったろ？」

「ん・・・校歌歌って、生徒会長がいさつするだけ・・・？」

「公立はsonで済むのか・・・やっぱ俺公立行けばよかったかなあ・・・。」

「玲治・・・？」

「ま、今は理麻こつちいるからいつか。でな、うちの学校はそれはただのおまけで、メインは・・・今年はなんだろ・・・。」

「毎年違うの？」

「ああ、去年は全学年ごちゃまぜ、無差別ドッジボールだったな。」

「ド・・・ドッジ！？・・・僕死んじゃう・・・。」

理麻は顔を青くしておろおろし始めた。

「今年はさらにだりーな・・・。」

理麻の隣からそんな声が聞こえてきた。理麻の隣の席は右側の一つしかなく、そこに座ってるのはもちろん怖い同室生、仙道彰である。

「だりーって、なんだか知ってんのか？」

「お前ら、俺より話聞いてねーとか、終わってる。」

「んだとー!？」

「れ．．．玲治．．．。」

「つ．．．で、今年はなんだよ? (くそう．．．理麻がいなきや今頃．．．)」

「鬼ごっこ。」

「はあ?」

「おに．．．ごっこ．．．?」

それ以上の説明はめんどくさくなったのか、彰は前の黒板を指差し、机に伏せってしまった。理麻と玲治が黒板の方を見るとこのクラスの委員長が、歓迎会の詳細を書いているところだった。そこには確かに鬼ごっここと書かれている。

「うはあ．．．くじで鬼か逃げる方が決めんのかよ．．．だる．．．。」

「鬼が．．．いいな．．．。」

「理麻．．．運動音痴だもんな．．．。」

「ん．．．。」

成績優秀の理麻だが、何故か運動がまるつきりだめで、常に体育の評価は赤点ぎりぎりなのだ。ちなみに50m走のタイムは12秒台だったりする。

「逃げる方じゃ．．．すぐ捕まるから．．．。」

「つかまったら罰ゲームだしな!」

「ば．．．ばつげ．．．なにをするの?」

「ん．．．俺はやったことねーからわかんねーけど．．．あとで委員長に聞いてみるか?」

「うん・・・。」

理麻は一心に鬼になりませんようにと願った。

HR後、理麻は玲治と共に委員長のところに行った。

「委員長、今年の罰ゲームなんだか知ってるか？」

「罰ゲームかい？今年はないよ？」

「ないのか？」

「その代わり、より多く捕まえた人はもちろん、逃げ切った人にも特典があるんだよ。」

「特典？」

「そう。ま、詳しい事は俺にも分かんないんだよね。生徒会が決めるから。」

「なるほどな。とりあえずよかったな理麻。」

「（こくこく）。」

罰ゲームがなくてよかった。後は鬼になりませんように、お祈りお祈り。

僕・理麻「しんにゅうせーかんげいかいつてなあに？」（後書き）

玲治は明らかに彰を敵視してますね。でも理麻が居るので声を荒げることもできないというww

ちよつとずつ理麻は彰にも慣れてくれるはず・・・でもなあ・・・怖がりになってるので・・・どうでしょう・・・でも、それじゃ総受けは遠のきますしねえ・・・難しいです。

僕・理麻「くじ運なんか最初からないよお・・・」(前書き)

やっぱり理麻君はこうなってしまうわけです。

それじゃないと話進みませんので・・・

僕・理麻「くじ運なんか最初からないよお・・・」

その次の日のHR。その時間は新入生歓迎会のくじ引きだった。箱の中に入っているのは二つ折りにされた紙。無地か赤い丸が書いてある紙がクラスメート分入っている。無地は逃げる人。赤い丸が書いてあるのが鬼である。理麻は恐る恐るその中から一つを選んで取った。でもまだ開いて中を確認することはしない。くじ引きをする前に紫音が来ていつせーのーでつで皆で開こうと言われたのだ。ほんとは今すぐにでも知りたいのだが、仕方がない。そしてHR後・・・。

「よーっし、じゃああけっぞー！！いつせーのー！！」

赤丸、赤丸、赤丸、無地・・・。。。

「うええええ・・・無地・・・。」

「理麻・・・お前そうとうくじ運ねーな・・・。」

「理麻だけ、逃げる方つてのもなんかすごい確率だね。」

「うつ・・・ど・・・しょ・・・。」

「安心しろー！俺が捕まえてやるよー！」

「ふええええええ・・・。。。」

だから抱きつくのはやめてよお・・・ぐるじ・・・。

「紫音にだけはつかまるなよ？馬鹿につかまったなんて知れたら、一生の恥だぞ。」

「玲治それはどういう意味だー！！」

「はいはい、大人しくしようねー、馬鹿紫音。」

「遥まで馬鹿とか言うなー！！！！」

どうしよう・・・逃げる方になっちゃったよお・・・絶対にスタ
ートしてすぐにつかまっちゃうよお・・・。

一日中、理麻はその事ばかり考え、次第に気分は最低値にまで落ち
込んだ・・・寮に帰ってから、それは続いている。

「はううう・・・。」

「なんだその声。」

「（びつくううう！！！）」

後ろから聞こえた声に理麻は盛大に驚いた。いるなんて思ってなか
った彰がいた。未だに彼とはなじめていない。

「んなに驚くことが。」

「ごめ・・・なさい・・・。」

「そんなに鬼ごっこいやか？俺はめんどくせーから嫌だが。」

「運動・・・できない・・・から・・・。」

「見た目通りだな。」

といつてもあれから、彰との会話は進歩したといつていい理麻だっ
た。最初はすぐに逃げ腰になっていた理麻だったが、今はそれはな
くなった。それでもまだどたどしいのは相変わらずで、彰もそれには
突っ込まない。というか、めんどくさいので言わないだけだが・・・
。それでも理麻はまだ彰の事を怖がっている。

「仙道君・・・は・・・どっち・・・？」

「俺？鬼。」

「うう・・・。」

仙道君も・・・鬼かあ・・・。うう・・・一人も知りあいでも逃げないよお・・・。一人で逃げたらすぐ捕まっちゃうのになあ・・・。

「さばれねーしな。ったく、めんどくせー行事だぜ。」

さばれないのか・・・。うう・・・そんなに初めからさばろうとは思ってなかったけども・・・でも、うう・・・怖いなあ・・・知らない人に追いかけられたら・・・ぞくぞく・・・怖い・・・。

そして、理麻の不安をよそに、とうとう日付は土曜日になり、新入生歓迎会が始まってしまふのだった。

僕・理麻「くじ運なんか最初からないよお・・・」(後書き)

ほんとに彰がどうにかなってない。彰が彰じゃない。お前不良なのに、なんで理麻を脅さないんだ！↑

優しい不良なんて・・・そんなっ・・・いやああ！っと思いがち
らも、彰はこのままでいくかもしれません。おい、不良だろうに・・・。

次回からいよいよ本格的に鬼ごっこスタートです！

僕・理麻「追いかけるのやめてー!!」

東側にある東体育館に、全校生徒が集まっていた。鬼は赤いＴシャツに黒いジャージの下を穿き、逃げる人は白いＴシャツに黒いジャージの下を穿いていた。まだ始まっていないため、理麻は玲治達の傍にいた。

「真っ赤……。」

「そういう理麻の顔は真っ青だー!」

「だ……だって……。」

怖いよ……。鬼の人怖いよ。周りを敵に囲まれてるってこんな感じなのかな……。うーん……。

「ま、どうしてももう無理だなんて思ったら、俺んどこいよ。捕まえてやるから。」

「玲治……それ、だめだと思う……。」

というかそれってどっちみちつかまっちゃうってこと?

理麻が首をかしげていた時、生徒会から、諸注意として、『校舎内は立ち入り禁止。あくまで学校の敷地のみが鬼ごっこの範囲である。つかまったら運営本部テントまで行って、つかまった人と捕まえた人の名前を記入すること。以上』という事が言われた。

「そっか……。それであとでその捕まえた人の数が多かった人に特典がもらえるんだ。」

「そういう事だな。理麻、がんばれよ!」

「玲治も頑張つてね。」

「おう。頑張つて理麻捕まえに行くから。」

「ひっ……。」

「俺もー！」

「え……。」

「僕も捕まえに行つちやおうかな？」

「遥君までえ？」

逃げる側の人は鬼よりも十分早く体育館を出ることができる。遊びで十数える奴の拡大番だ。まあ、敷地が広いからなのだが……。理麻は、玲治達にしばしの別れを告げ、とことこ体育館を出た。そして、どこか身を隠せるところはないかを探し始めた。最初から逃げ回る事は頭がない。どこかに隠れて最後まで見つからないようにしようと思ったのだ。この学校は広い。広すぎるほどである。だからこそ、隠れるところはいっぱいあるのだが……。

「あまりばれやすそうな所じゃ駄目だね……。んー……。」

理麻はきよろきよろしながらも隠れられるところを探していた。すると、校内の至る所に設置されているスピーカーから、『ポーン』という音が聞こえた。

「これって……。鬼がスタートしたっていう音？……。どうしよ……。早く隠れないと……。よし、ここにしよ。」

そついつて、理麻は近くにあつた何かの用具入れと壁の隙間に隠れた。理麻の体型なら余裕で入れるところだ。理麻はどぎまぎしながらも、しばらくそこに身をひそめることにしたのだが……。

どたばたどたばた

「まてえー!!」

「うひゃああああ!!」

どたばたどたばた………

あちこちで逃げて追いかけてという音が聞こえてくる。いつここにいるのがばれてしまうか、理麻の心は不安でいっぱいだ。足が近付いてくるたびにびくびくし、離れていくとほつとする。そんなことを繰り返していた理麻だったが、再び足音が近づいて来ていてびくびくしていた。しかも、今回の鬼はいつまでたっても理麻が隠れているところの近くにいます。それも、声を聞く限り二人はいます。

「やつべーな。鬼ごっこだったって、殆どの逃げる奴隠れてやがる。」
「もつかくれんぼじゃね?」

「そうかもな。しかも、すぐ見つかるようなところには隠れてねーんだから、探すのー苦労だぜ。」

「そうそう、こういう誰も隠れられないような隙間にいる……いたあ!!」

「ひっ……。」

「まて——!!」

「(ひひひひひひひひ、見つかったよお!!!!)」

二人の先輩らしき生徒に追いかけられながら、理麻は必死に逃げた。

そして――

「おい、さっきのちびどこ行っただ？」

「ちっ、逃がしたか。あとちょっとだったのによ。」

「しかたね、また違う奴見つけるか。」

「ああ。それにしてもお前の勘ってよく当たるよな。」

先輩二人が遠ざかっていく音を理麻は傍の茂みの中から聞いていた。しかし理麻は一人ではなかった。

「急に……足を踏むな。」

「あの……ごめ……なさい……。」

もう駄目かと思ってたら、足がもつれてバランスを崩した。そしてよろけながら茂みに突入してしまい、ギュムっとこの人の足を踏みつけた後、ばたんと倒れてしまった。

「謝ればよし。それに、追いかけてたのなら仕方がない。だが、

次は気をつける。」

「は……い……。あの……。。」

一個聞きたいんですが……。なんで枕が此処にあるの？

僕・理麻「追いかけるのやめてー!!」(後書き)

さて、誰でしょう。こんなところでさぼってるのは!!

枕持参のあの男です。

僕・理麻「不思議なこの人どんな人？」

僕は今、名前も知らない先輩？と一緒にいます。にしても、またぐうぐう寝始めちゃったんだけど……。この人、鬼ごっこに参加してるんだよね？

「くすつ……。あーあ。とうとう見つかったなあ。ここでもんなことしてるの。今までほとんど知られてなかったのになー。」
「ふえ……。？」

クスツと笑ったその先輩はよいしょって身体を起こした。全身ジャージを身につけていて、腕には何かの腕章をつけている。そこには生徒会と書かれていた。

「生徒……。会……。？」

「あれ、君一年じゃないよね。」

いつの間にか口調まで代わっている。さっきの凜としたしっかり者からへにやつとした和やか系になっている。

「二……。年生……。です……。」

「二年なのに僕のこと知らない……。あ、君もしかして季節外れの転入生？そういえば、二年に来たって会長が言ってたようない……。そっか、それじゃ知らないよねー。僕、遠藤^{えんどうあゆむ}歩。一応、この学園の副会長ね。」

「副……。会長さん……。」

ええええええええ！？生徒会副会長さんって……。は……。初めて見た……。じゃなくて……。

「ご……ごめんなさ……僕……知らなくて……足踏んじ
やったり……その……」

「いいよー。別に。ただ、一個だけ条件。」

「条件……」

「僕がこんな感じなの、君だけの秘密にして。お願い！」

「え……こんな感じて……どうい……」

「僕ね……。一般の生徒の前じゃ、こんな風に真面目な性格の
副委員長で通しているが……生徒会メンバーの前じゃこんな感じ
なんだ。」

「え……」

今一瞬、話し方変わった？え……え……？

「ほらやつぱ生徒会だといろいろあるじゃん？だからさー、真面目
気取ってなきゃ立場なくなるんだよねー。だから、お願い。その代
わり、終わるまでこいて良いよー。僕といれば誰も近寄ってこな
いから。恐れ多い副会長って言われてるんだよね。」

「いい……ですか？」

「うん。にしても、そのおどした話し方は……素？僕のこと
知らなかったんだから、おびえてるわけじゃないよね。」

「（こく）……人……みしり……です。」

「そっかー。ふふふ……なんかかわいいー。」

「可愛い……？」

「そーいえば、名前聞いてなかったねー。」

「あ……篠宮……理麻です……」

「そっかー……。じゃ理麻ちゃんていい？」

「（……こくん）」

歩はにこーつとわらうと後ろにあった木に寄りかかって座った。理

麻もそのよこにちょこんと腰かける。

これならなんとか・・・つかまらないでいられるかな・・・。

僕・理麻「不思議なこの人どんな人？」（後書き）

歩は二重人格ではなく、スイッチみたいに使分けしてます。素は和やかなほう。

書いてくうちにキャラが変わってきてますね。

今のところ途中でキャラが変更というか道から外れてるのは仙道が一番ですけどww全く困ったもんだ。

僕・理麻「副会長さんすこい・・・?」(前書き)

いまさらですが、登場人物ページの副会長のところを少し加筆しました。

よろしければご覧ください。ご覧になられなくても話は理解できますので。

僕・理麻「副会長さんすげい・・・?？」

それからというもの、理麻は追いかけられるという事がなかった。

鬼に見つかったのは多々あったのだが、理麻の隣にいる副会長の姿を見て皆まわれ右して去っていく。まあ、鬼が近付くたびに歩がにらみを利かせているのは内緒の方向である。

「ねー、僕といるとつかまんないでしょ？僕の姿見ると皆いつつもああいう感じだから。副会長の特権だよねー。」

「（こ・・・こくん。）」

ちよつと遠慮勝ちに頷いた理麻。なんかずるしてる気がするけど・・・いいのかなあ・・・。

ぎゅ。

「ふえ・・・!？」

「あつはは、やっぱすっぱり入っちゃうねー。理麻ちゃんちっこいもんね。」

そう言つて笑いながら、歩が後ろから理麻を抱きしめていた。

「あ……あの……。」

「僕さあ、寝るのはどこでも寝られるんだけど、やっぱこう……何かに抱きついて寝たいんだよねー。ね、鬼ごっこ終わるまで、抱き枕になつてもらつても良い……?」

「だき……まく……ら……?」

「そ。理麻ちゃんナイスサイズ。ね、いいでしょー?」

「え……う……あ……え……と……。」

どうしよう。どういえばいいの? 良いですよって言つた方がいいのかなあ……。でも……はたから見たらへんだよね……。これ……。

「じゃ、おやすみ……。くうくう……。」

「も……寝ちゃった……。? 早い……。な。」

後ろからすぐに聞こえてきた寝息に理麻はとても驚いた。しっかりと理麻に抱きついたまま歩は寝てしまっている。すこしもがいて抜け出せるか試みたが、あまり動いて起こしてしまうのもどうだろうと思い、理麻はじつとしていることにした。地面に座り、やや身体が後ろに倒れて、歩に寄りかかっている状態である。

なんか……。ぼかぼかしてて……。きもちいいなあ……。いいお昼寝日和だね……。歓迎会もお昼寝にすればいいのになあ……。ふに……。ふにゅ……。

「くすくすっ・・・あーあー。そんな無防備に寝ちゃってさあ。僕の事信用してくれてるのかなあ？でも、僕は君が思うより、危ない人かもよ？理麻ちゃん、っ・・・なーんてね。」

しばらくして歩が目覚めたとき、理麻はすやすや寝ていたのだった。なでなでと歩は理麻の綺麗なハニ・ブラウンの髪の毛をなでた。そんなことをしていたら、校内放送用のスピーカーから歓迎会実行委員の声が聞こえてきた。

『ただいまを持ちまして、鬼ごっここの時間切れをお知らせします！捕獲申請はただいまより五分以内を最終期限とさせていただきます、これより捕獲した物は無効となります。発覚次第、そのカウントはみなされません。急ぎ、申請をしにテントにお越しく下さい。その他の生徒は、それぞれ寮に戻ってください。これにて解散とします。お疲れさまでした。』

「終わっちゃったか。さーって、テントにいつて、それから会長のところにさぼってごめんねーって言って・・・それから・・・んふふ・・・どうしよっかねえ。」

軽々と理麻を抱え上げた歩はそのままどこかへと歩いていった。

僕・理麻「副会長さんすごい・・・?」(後書き)

いきなりお持ち帰りされちゃった理麻。

どうなっちゃうんでしょうね。あ、あまり期待を膨らませてはいけません。そんなあれな展開はないかと思うんでww

僕・理麻「ここどこですかぁ!？」（前書き）

連れ去られちゃった理麻君の行く末は・・・

はい、そんなわくわくする展開じゃないです。あと、やっとこれで登場人物紹介に書かれてるキャラは出せたと思います。

僕・理麻「ここどこですかぁ!？」

「え……すごい部屋……じゃなくて……ここどこぉ？」

明らかに理麻は動揺している。それもそのはず、いつの間にか寝ていて改めて起きたらそこは見知らぬ部屋。しかも理麻の寮の部屋よりもうんと豪華な部屋である。どうやら寝室にあるベットのうらしいが。

「……ベットおつきいなぁ……。ダブル？キング？ん……。とにかくおつきいんだよ。」

保健室ではない。それは確かなことである。明らかに私物らしき本とか、時計とかなんかよくわからない雑貨がいつぱいあるし、ベットの上面にいる理麻の横には青い縦長のクッションがある。抱き枕にちょうど良さそうである。ベット傍の机には理麻の理事長からもらった伊達眼鏡もあった。

理麻はとりあえずそれをかけた。何となくだったが、最近はこのをかけてないと落ち着かないのだ。ホントにおまじないがかかっているのかもしれないと、理麻は思っている。

ん……。抱き枕……。？……。なんだろ……。なんか最近聞いたことあるけど……。れ……。玲治が……。抱き枕？合わないなあ……。せ……。仙道く……。ないない。紫音君っぽいけど……。そんな話したっけ……。？

理麻が一人そんなことを考えていた時だった。閉ざされたドアの向

こうから話声が聞こえてきた。どうやらこの部屋の持ち主？の声のようだった。

「ぎゃああああああ隼斗——首！首絞まってぎゃああああ。」

「てめえは、死ね！！いやいま殺す！！」

「いぎゃああああああごめんって……うやああああ！！！！！！！！！！」

な……なに……修羅場！？……こわいよお……こわ……こわ……首絞め……ええ……どんな状況なのお……？

「大体てめえは毎回毎回行事になるとさぼりやがる。外ではくそまじめ貫きやがってるから、誰もさぼってるなんて思わねーからさがさねーし、こっちは汗水流して走り回ってたって言うのにテメエは……。」

「あつはは、隼斗逃げる側だったもんねえ……。ご苦労」

「ああ？」

あれ……？

二人いるうちの首絞められてた方？つてもしかして……

そう思った理麻はとこととドアに近付きちよっただけ隙間を開けて隣の部屋を覗いてみた。隣はリビングスペースらしい。そしてその中央に置かれたソファに机を挟んで向かい合っているのはやはり、あの副会長だった。

やっぱ、あの声は副会長さんだ。ん？・・・じゃあこの部屋って副会長さんの部屋？でも・・・なんでここに僕がいるんだろ・・・ん？ん？ん？・・・あれっ・・・副会長さんと話してるの誰だろ・・・。同室生の人かなあ？にしても・・・あまり仲良くないのかなあ・・・。相手の人の顔見れないから、わかんないけど・・・。って・・・わ・わわわわ・・・。

ぎい い・・・

ちよつと理麻がドアにもたれかかってしまい、そのせいで音を立ててドアがさらに開いてしまった。瞬時に副会長とその話相手の生徒の視線が理麻に集まってしまった。ドアにしがみつくように理麻はあたふたしてしまう。それを見て、副会長はなんら変わらぬ明るい調子で話しかけてきた。

「あ、理麻ちゃんおはよー！って言っても夜だけだね。そんな遅い時間じゃないよ、まだ9時。」

「9時は十分遅い時間だ。つか、どういう事が説明しろ。」

未だにドアのところにいた理麻を歩がソファに連れていき、よこに座らせた。そこでようやく理麻は歩の話相手の顔を見た。

うはあ・・・き・・・金髪だよ・・・目も青くてきれいだし・・・かつこいい人だね・・・。副会長さんもモテそうな顔してるし・・・。ん・・・そういえば・・・この学校って結構そう言う顔だちの人多いなあ・・・。僕は普通だけど・・・。外国の人・・・なのかなあ・・・。

「あ、理麻ちゃんもしかして隼斗の事も知らない？」

「俺のこと知らないとかどんだだけだ。」

「しょうがないよ、理麻ちゃん転入してきたばっかだもんね。」
「（ごくごく）」

「ああ・・・お前が、あの二年に来た転入生ね。なら知らないのもうなずけるか。俺は、椎堂隼斗しゅうはやと。この学園の生徒会長だ。」

僕・理麻「ここどこですかぁ!？」（後書き）

生徒会長出てくんの遅!

王道とか言つてて一番王道には欠かせない生徒会長やっとな出てきました!

隼人はまじめな生徒会長です。まあ、口悪いですけど。

僕・理麻「そんなの卑怯だよ・・・」(前書き)

そして、理麻はとある事実をしるのですw

僕・理麻「そんなの卑怯だよ……」

なんと、副会長さんを殺そうとしてたのは、会長さんでした。びっくりです。

「！生徒会長さん……。はじめまして……。篠宮……。理麻です……。」

「理麻ちゃん、人見知りなんだってー。だからあんま怖がらせたりしたらだめだよ。嫌われちゃうよ。」

「んだとこのやろうが。そんなことより、なんでその転入生がお前の部屋の、しかも寝室から出て来てんだ？まさか、鬼ごっこさぼってほんとは……。」

「何考えてんのかなあー？僕は正真正銘、外で寝てさぼってただけだよ。理麻ちゃんが証人、ね。理麻ちゃん。」

「えっ……。は……。はい……。」

「って、やつばさぼってたのかこの野郎が……！」

「あ、やべ」

「その顔でやべって言ったっておせーんだよ……！」

生徒会長さんが、副会長さんに殴りかかろうとしています……つて……。わわわ……。！？

「理麻ちゃんガード！なんっちゃって。」

「っわ……。あ……。」

「……。ちっ……。」

ば……。僕を盾にしないでくださいよ……。あわわ……。

歩の隣にいたのが悪かったのか、理麻は盾にされてしまい、机越し

に隼斗と向き合う形にされた。真つ青な瞳の中に理麻がうつりこむ。そして気がつくと顎を隼斗につかまれてぐいっとな顔を近づけさせられた。

「え．．．え．．．え．．．？」

「お前の顔．．．どつかで見たようなそうでもないような．．．。」

「え．．．．？」

「いやでも．．．しかし．．．まさか．．．いやいや．．．でも．．．。」

「隼斗が壊れたよー！ごふつ．．．。」

「壊れてんのはテメエの頭だ！」

「ひつ．．．あの．．．はな．．．してくれ．．．ませんか．．．？」

「ああ、わるい。ちよつと探してるやつと似てたもんだから。悪かったな。」

「ぎゃあああああ！隼斗が謝ってるー！！超俺様主義の隼人がー

——ぐはあ！！」

「もう一遍言ったら落とす。」

「うわあ．．．本気の目だ！。理麻ちゃん、ああいう目で見られたらすぐ逃げるんだよ。じゃないと毒牙にグサツてなるからね。」

「毒牙．．．？」

「んなもんあるか！！」

というより．．．さつきから聞きたいことあるんだけど．．．今聞いていいのかな．．．。

「あの．．．一個聞いても．．．いいですか．．．？」

「なにー？」

「僕．．．なんでここにいますか．．．？」

「あ、言っの忘れてたね。じゃ、まずここは僕の部屋ね。理麻ち

やん鬼ごつこの最中僕と一緒に寝ちゃったんだよ。で、そのまま終わっちゃったけど、理麻ちゃんなかなか起きなかったし、部屋連れて行くにも部屋知らないしで、ここ連れて来ちゃったのだ！」

「部屋知らないって・・・清水に聞けば一発だろ。転入生ならなおさら・・・。」

「健っちはねー・・・探すのめんどかったんだよ。」

「お前なあ・・・ん・・・じゃあ篠宮が此処にいんのはだれも知らないのか？」

「そーなるねー。」

「・・・篠宮、部屋何号室だ？」

「え・・・えと・・・2427号室・・・です・・・。」

「2427だな。」

そういうと隼斗は携帯を取り出し、どこかにかけ始めた。そしてしばし話をして、ぷつと切った。

「清水に伝えたから、まあ、門限破りにはならないだろう。」

ちなみにこの寮の門限は9時。さつき過ぎたばかりである。門限が過ぎると全ての出入り口が閉まってしまうのだ。門限を破るといろいろ罰があるので、皆守るようにはしている。なお、一部の生徒のみが知る抜け道があるらしい・・・。

「つたく、生徒会が関係したことで門限破りなんか出したら、あの風紀委員長がくるところだったじゃねーか。」

「あつは、ごめーん でね、まだ僕の話続いてるからね。それで、一個報告ー。」

「報・・・告・・・？」

「残念だったねー理麻ちゃん。つかまっちゃったよ？」

「ふえ・・・？」

につこりと笑いながら、歩は着ていたジャージの上のファスナーをおろして前を開けた。その下にあっただのは……。

「あ……かい……Ｔシャツ……。え……。鬼……。？」
「えへへー。そう、僕鬼だったんだ。ごめんねー。聞かれなかったから言わなかったんだけど、生徒会も平等にくじで決めたんだよ。隼斗は逃げる方で、もう一人、書記兼会計は鬼ね。で、僕も鬼。ぎりぎりで捕獲申告したから、理麻ちゃんはつかまったってこと。」
「え……。ええ……。。」

そんなのありなお……？

「あの……。つかまったら……。何かあるんですか……。？」

「んつとね……。なんだっけ？」

「お前それでも生徒会か？今年は、鬼が捕まえた奴になんでも一個お願いできるんだよ。」

「おね……。がい……。ですか……。。」

「まあ、まだ結果集計終わってないから、集計が終わり次第通知を該当者に配布。そののちはそれぞれに任せるってことだ。歩、生徒会としての立場忘れて変な願いを言うなよ？」

「変な願いつて何ー？大丈夫ー、俺そーいうのしないから。隼斗ならしそー……。。」

「なんかいったか？」

「ま、楽しみにしててね。」

「は……。い……。。」

ものつすこい不安なのは僕だけなのかなあ……。

僕・理麻「そんなの卑怯だよ……」(後書き)

なんか最近、歩×理麻になってます……

玲治どこいったんでしょう……総受けは……？
まんべんなく頑張っていきます！

僕・理麻「え・・・おねがいて・・・これ？」

世間はいま、ゴールデンウィーク真っ只中です。で、そのゴールデンウィークを使って、歓迎会のご褒美をもらう人が多いみたいで、僕もその一人なんだけど・・・。

ぱっ ちん

ぱっ ちん

ぱっ ちん

ぱっ ちん

ぱっ ちん

さて、何の音だかわかる？

答えはホチキスで書類を留めてる音でしたあ。

そしてここは生徒会室なんだよ。僕初めて入った。結構広くて、一番奥の窓側の席がああ、金髪の椎堂会長の席で、その前に向かい合わせで二つの机があつて、その右側が副会長の席。僕が今座ってるのは会計兼書記の人の席らしいけど、今は出掛けてるんだつて。

「理麻ちゃんせつかくの休みなのにごめんよ。隼斗がうるさくつてさあ……。」

「い……いえ……。こんなことなら……ぼくにもできる……。んで……。」

「その箱に入ってる書類が最後だから、もちつとがんばろつか。」
「（こくこく）」

副会長さんのお願いは、たまつてしまった生徒会の仕事を手伝つてほしいってことだったんだ。まあ、それなら体力使わないし、僕もぜんぜんできるからよかった。

理麻は書類を留める作業、そして歩は今回の歓迎会の企画報告書類作成をするためにノートパソコンに向かっている。よって室内は恐ろしいほど静まり返っていて、ぱっちゃんという音が、かたかたかたかたという音しか聞こえない。そして黙々と作業は進み、三時間後に全てが終わったのだ。

「いやぁー理麻ちゃんが手伝ってくれて助かったよぉー！一人じゃ今日中に終わったかどうか分かんないもんね。」
「なら・・・よかったです・・・。」

そう言われて、理麻も自然と表情が和らいで無意識にはにかむ。それを見て理麻に向かいあつて座っていた歩が身を乗り出しかけたとき、生徒会室のドアが開いた。

「その様子だと終わったようだな。」

「うつ・・・（タイミング悪ー）。隼斗ー！もっちろん！理麻ちゃんのおかげだよー！」

「なら篠宮を生徒会副会長にするか？あ？」

「隼斗、目がマジなんだけど。」

「ご苦労だったな篠宮。これは俺からだ。」

そういつて椎堂は理麻の前にプラスチックの容器に入った黄色いものを置く。それは二層になっていて下は黄色そしてわずかな上の段に茶色い層がある。そしてちょこんと乗った白いクリーム。それはこの学園の寮の食堂に併設されたカフェの限定プリンだった。

「これ・・・って・・・。」

「休み返上で、この馬鹿がためた仕事をやらせた礼だ。全く、本来ならもつと違う内容の願いでもいいだろうに・・・。」

「だってじゃなきゃ終わんないもんー！」

「威張るな！！だからこれはその給与。歩、茶煎れる。」

「人使いあらいいよー！てか、僕の分はないのかなー？」

「あるわけがない。あ、コーヒーブラックな？」

「ええー・・・しかもお茶じゃないし・・・。もう・・・理麻ちゃんはコーヒー？紅茶？緑茶？ウーロン茶？」

「こ・・・紅茶・・・ください・・・。」

「あいよー。砂糖はなんこー？」

「み・・・三つです・・・。」

「多!？」

「甘い食うのに、さらに甘い飲むのか・・・。」

理麻はおそろしいほど甘党ちゃんなのだ。ケーキとジュースは一緒に食べるのが普通だと思っている。

「理麻ちゃんやっぱ可愛い。」

「かわ・・・い・・・?」

「さつさと入れやがれ馬鹿が!!」

「ごふう!!?」

「(びくびく)」

歩の後頭部にそこら辺にあった少々厚い本がさく裂した。頭をさすりながら片手で器用にお盆を持って戻ってきた歩。隼斗の前にコーヒー。理麻の前に甘甘の紅茶。そして自分の前に普通のストレートティーを置いた。理麻はその間にプリンを開けて付属のプラスチック製のスプーンでそれを掬った。そしてぱくんと口に運ぶ。

お・・・おいしい・・・。。うわぁ・・・やっぱおいしいんだあ・・・。なかなか食べれないんだよね・・・これすぐ売れちゃうし・・・限定10個だし・・・食べれるなんて幸せだよあ・・・。会長さん・・・ほんとにありがとう・・・。

「あつはは、理麻ちゃんすつごく美味しそーに食べてるー。ね、おいし?おいし?」

「はい・・・。。あの・・・会長さん・・・ありがと・・・。」
「残すなよ?」

残すなんて・・・残せる自信ないですよ！！

「理麻ちゃん、一口ちょーだい！」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・ん・・・・はい・・・・・・・・」

ん・・・・・・・・独り占めしたかったけど・・・副会長さんに言われたら仕方ないよね。

一掬いしたプリンを向かいに座っている歩に差し出した。あーん、とそれにかぶりつこうとした歩だったが、そのスプーンは横から伸びてきた手によりさらわれ、プリンはスプーンの上から消え去った。

「え・・・・・・・・」

「ああー！！！！隼斗が取ったあ————！！！！」

「俺が買ってきた奴だぞ？俺が食う事に何の文句がある？だいたい、お前になんか食わせるために買って来てないんだよ馬鹿。」

ぺろりと意地悪げになにも乗っていないスプーンを舌でなめながら、プリンを奪った隼斗は歩を見てそういつていた。

う・・・・・・・・うわあ・・・・・・・・。なんだろ・・・・かつこいい人って何やつてもかつこいいのかなあ・・・・・・・・。今の・・・・様になってたよ・・・・。女の子とかいたら今頃、キャ————って言ってるよね・・・・。それくらいすごかった・・・・・・・・。

そう思いながら、騒ぎ出した歩とそれをクールに受け流す隼斗を横目に、理麻はプリンを食べ進めたのでした。

僕・理麻「え・・・おねがいつて・・・これ？」（後書き）

ええ～なお願いでしたね。すみません。デートでもさせるかと思いましたがこのほうが歩らしいかと。で、結局会長もいるっていうw
まだ書記兼会計が出てこない！？いつ出てくるんですか！！↑

で？最後は会長が得した？

あれって間接キスに入るよね？

ひそかに理麻に惚れてる二人。そして理麻は気づいてないっていうw
会長は最強なのですな。

僕・理麻「せっかくの、おやすみだからね。」（前書き）

休みがほしい・・・そう思ってたら、こんな話になってましたw

長期休暇ってやつがすっごくほしいです。まあ、夢のまた夢ですけど・・・

僕・理麻「せっかくの、おやすみだからね。」

今年のゴールデンウィークは土・日・月・火・水と五連休なんだ。で、土曜日に歓迎会をして、土・日・月曜日は筋肉痛に悩まされてしまった僕は、火曜日に副会長さんのお手伝いをしたんだ。で、今日は水曜日。連休最後の日なんだ。

なので今日は玲治と一緒に買い物に出かけてます。

「玲治、なんか用事とか・・・ほんとになかった？」

「ないない。つか暇だったな。特になにするわけでもねーし、部屋で寝っ転がってるなら、理麻につきあった方が全然いい。」

「そか・・・ならよかった。僕あまりここら辺わかんないから、一人じゃ迷子になりそうだったもん。」

僕の家がある街と、学校がある町は車で十分くらい離れたところにあるんだ。だからここら辺はあまりというか・・・全然来たことないんだよね。玲治もそうだったらしいけど、もう慣れたって言うてたから、今日は道案内について来てもらったんだよ。

「にしても、理麻。お前副会長にあっただんどう？」

「ん・・・あと会長さんにもあった。プリンもらった。」

「そっかよかったな・・・って・・・そうじゃなくて。」

「ふえ？会っちゃだめなの？」

「だめっつか、あんま関わんない方が良くぞ？」

「なんで？」

「ん・・・いろいろ面倒だから？あの二人、すっげー顔いいだろ？」

「そうだね、モデルさんみたいだったね。」

「そういうやつ、結構あの学校多いだろ？」

「うん。」

「そういうやつには少なからず・・・っつか、必ずファンクラブがあんだよ。」

「ファン・・・クラブ・・・？なんか芸能人みたいだね・・・。」

「

「まあ、そんな感じだな実際。理麻は、男同士が恋愛してるの嫌だとか気もいと思う方？」

「ん・・・よくわかんない・・・。でも、それも一種でしょ？好きになるのなんて、人それぞれでしょっておもうかな・・・。」

「そっか。んじゃ、隠してなくても良いか。あのな、あの学校そういうやつが結構あるんだよ。」

「同性愛？」

「そ。だから、ファンクラブの奴らは・・・たとえば会長のファンクラブの奴は会長と付き合いたいだとかそういう事を狙って所属してたり、会長に変な虫っつか、なんっつの？うん・・・まああんま会長にべたべたしてるやつ・・・抜け駆けする奴が出ないように見張ってたんだよ。」

「会長さんは、自分のー！！ってかんじ？」

「ん・・・まあ・・・簡単に言うとそんな感じ。でな、そのファンクラブの奴に一度でも敵だと思われたら、平穏な学校生活なんかまず無理になる。そりやすっげーいじめを受けたりすることもしばしば・・・。」

「うえ・・・。」

「だから、ファンクラブ持ちの奴にはあんま関わんねー方が良いんだ。まあ、ファンクラブ持ちがそいつを認めてたら手だししてこないっつか、お気に入りにいじめなんかしたら、そいつが今度は標的になるからな。」

「こ・・・こわ・・・。」

「だから、まあ仲良くするなとは言わないけど、気をつけるよ？特

に生徒会三人のファンクラブと風紀委員長と副委員長のファンクラブはおつかねえ。」

「れ・・・玲治にもあるの?」

「ファンクラブ?さー・・・どーだろ。あんまそういうの気にしたことないからな。もしかしたらあるかもな!理麻にもあったりして。」

「ええっ!?」

「わっかんねーぜ?帰ったら遙にでも聞いてみつか。」

「え・・・なんで遙君?」

「あいつそういうの人一倍くわしいからな。情報通ってやつ?」

「へえ。」

「あ、ほらここだぞ。にしても・・・何買ったところで。今さら服?」

二人の目の前にはいまどきの服満載のアパレルショップがあった。結構広い店内には様々なジャンルの服が壁や棚に陳列されている。

「ん・・・玲治は知ってるよね。僕のお母さん。」

「ああ・・・ああ・・・なるほど・・・それでね。」

う・・・その反応はなんなのかなあ?そりゃね、僕も肉親じゃなかったら多分引いてる。ううん、若干今もどうかしてるって思うよ。お母さんはまあ今までの行動知ってる人がいればわかると思うけど、僕を溺愛してる。そりゃもう・・・めにいれてもなんとやら・・・僕を女の子の子と思ってるのになって思う。まず、何かしらどこから帰ってきたら可愛いぬいぐるみか可愛い系の女の子の服を買ってくるし・・・。ちっさい頃は女の子の服着てた時もあったなあ・・・。

「だもんで、その・・・着れるまともな服があんまなくて・・・これも僕が自分で買った奴だしね。」

「なるほどな。んま、この機会にたんまり買ってけよ。」

「うん。玲治も自由にしていいからね。僕勝手にフラフラ見てるから。」

「迷子になるなよ。」

「なんないよ!!」

「じゃ、会計終わったら俺探して声かけてな。そこらにいるから。」
「うん。」

玲治としばしわかれて理麻は服選びに向かったのだった。

僕・理麻「せっかくの、おやすみだからね。」（後書き）

玲治にもあるにきまつてるだろ、ファンクラブ。親衛隊って風にしてもよかったんですが・・・ファンクラブのほうがなんかいいかなと・・・。なんとなくですが。

で、最近玲治の影薄くなったので、此处で登場させましたね。理麻の家と玲治の家は割と近所にあるんですけど、高校入学で離れてたんですね。理麻は公立に通ってたので。

俺・理麻「しまった、文句言って蹴っ飛ばしにいくの忘れてた」(前書き)

はい、サブタイの通り、僕の方ではなく俺の方の理麻の視点になります。

そして、久々にあの人が出てきますね。

俺・理麻「しまった、文句言って蹴っ飛ばしにいくの忘れてた」

その日の夜。理事長室の前に、理麻がいた。ドアの隙間からまだ明かりがもれてきているから、どうやら奴はまだ中にいるようだ。理麻はやや乱暴にドアを一応ノックして中に入る。案の定奴は机に向かっていた。しかし、入ってきた理麻の姿を見るなり、理事長の暁圭吾は視線を理麻に向けた。

「こんばんは・・・篠宮君。いや・・・閃夜？」

「一瞬で見抜くか。さっすがってところか。」

「おお、あつてたんだね。いやあ、転入して来た時はびっくり閃夜だと思つてさあ。篠宮君に抱きついちゃったよ。」

「何故に抱きつく。」

「だめ？」

26のおっさんが小首を傾げるな。だめに決まってるだろうが。特にお前は問題外だ。

「いい年して生徒に手、出しているのかよ。」

「僕、教師じゃないからね。なんか飲むかい？」

「いらね。俺は飲み食いしないんだよ。」

「そうだったつけ。いやあ、さすがに腕は衰えたりしないんだね。喧嘩教えたのは間違つてなかったかなあ？」

「お前に教わったのは族の世界の事だけだし。大体ヘタレのお前に喧嘩教わるわけないし。」

「ヘタレじゃないの。これは仮の姿だって閃夜も知ってるくせにね。」

「元この町最強の族のリーダー。いまは幻の不良って言われてるってねえ。」

「まだそんな噂たつてんの？で・・・今日はなにしに来たの？」

「お前蹴っ飛ばしに。」

「っ・・・えーっと・・・理由は？」

「この俺に抱きついた。後昼の俺ビビらせたからなんかむかつくから蹴らせる。」

「うわぁ・・・やつぱ来た。」

「ああ？大体いつも抱きつくなくなつててるよな？なのにお前はまだ抱きつきやがって。」

だいたい、昼の俺は誰かれ構わず抱き尽かさすぎなんだよ。なんだ？好きなのか抱きつかれるの？違うだろ？ったく、覚えてる俺の身にもなってみろ。

「思い出すだけで鳥肌が立つ！」

「ほんと、同一人物とは思えないね・・・。気を付けなよ？あの一件以降、『twilight』の奴ら閃夜を探してるしね。」

「あいつらに見つかつても、返り討ちするから問題ねーよ。」

「閃夜はともかく・・・篠宮君の時はどうするのさ。」

「それは・・・。強制チェンジする。」

「ま、閃夜次第だけど。あんま敵を見くびり過ぎるのもよくないよ。喧嘩だけ強くてモ駄目なんだから。」

「？」

「そういうところはおんなじなのかな。」

「わっけわかんね。じゃ、もう帰る。」

「あれ、蹴ってかないの？」

「気が失せた。でも今度やったら蹴る。」

理麻はそういつて理事長室を後にした。確かに不安がないわけじゃない。もし俺ではなく僕の方の理麻だった時に『twilight』のやつらにあつて閃夜だとばれてしまったら？間違いなくリンチさ

れる。勝ち目なんかないも同然だ。その時俺がナイスタイミングで
変わればいいが・・・上手くいくかは分からない。

「めんどくせ・・・二重人格とか・・・でも・・・あんなこと
があつたんだ・・・仕方ないのか・・・。」

僕が忘れた過去。

俺が覚えてる過去。

僕が体験した過去。

俺は体験してない過去。

・そしてそれこそ二人の理麻が生まれた原因・・・・・・・・・・

俺・理麻「しまった、文句言って蹴っ飛ばしにいくの忘れてた」(後書き)

ってことで理事長登場です。

何気に理事長いろいろ知ってるっていうのは、族にも通じてるからですね

僕・理麻「足っ足っ足がっ……」(前書き)

W 今回から新しい章突入です。まあ、日常編みたいなかんじですけど

僕・理麻「足っ足っ足がっ……」

夏です。まあ、初夏って感じ。梅雨に入ってたばっかの時なのに……。

「なんで……水泳？」

まあ、中学の時とかも6月の半ばから水泳の授業やるけど……早いと思うんだ。海の日からにしようよ。

「理麻泳げるようになったか？」

「浮き輪頂戴……」

「なしじゃ無理か？」

「（こくん）」

無理ってわけじゃないけど……１メートルも泳げずに沈んじやうなんて当たり前だった。浮かばないんだよ、体が。

プールサイドで準備体操を終えて、シャワーをくぐる。つべたい……。きーんってなるよ。

で、今日は初日だから泳法は自由。6コースあるどこを使ってもいいって先生が言ってたから僕と玲治、紫音君、悠君は6コース目を占領。あ、6コースの隅っこで仙道君が足突っ込んでる。泳ぐ気ないなあ？ちよつとずるい。

まあ、僕もプールサイドから一步プールに入ろうとしないんだけど……。

「理麻、いつまでそんなところにいるつもりだ？」

「だって……無理……。」

「いつまでたっても泳げねーぞ？」

「でも……無理だよ……泳げないもん……。」

足がつかないような深さなんだぞ！玲治はいいよね、背高くて。高校のプールって何か深い気がするんだもん……。

「理麻、どーん!!!」

「うぎゃ ああああああああ ああああああ ああああああ
 ああああああ ああ！ ああ！ ああ！ ああ！ ああ！ ああ！
 ああ！」

え・・・え・・・え・・・え・・・えええええ！？
↑ 玲治・悠
の声にならぬ声

「お……おんまえ、紫音……突き飛ばしてんじやねーよ……」

「だって、理麻がいつまでも入らないから！」

「そういう問題じゃ……って、理麻浮かんでこないよ？」

悠の声に、玲治はようやくそれに気がつく。

「り・・・・理麻――――！！」

ごぶごぶ・・・あ・・・冷たくて気持ちいい・・・あは
は・・・。

まあ、そこで僕の意識はなくなった……

僕・理麻「足っ足っ足がっ……」(後書き)

人をプールにつき落としちゃいけません。

あくまで小説の中での出来事です。ほんとにやったら恐ろしいことになるかもしれないので、よい子も悪い子もやめましょう。

次回に続きます。

Side?」「なんでおれがんなことしなきゃ・・・」(前書き)

此処でお知らせ。

まずお気づきかと思いますが目次のところで(改)とすべてに表示されてますが、サブタイトルを変更しただけですので読み返す必要はありません。

次に、人物設定の身長を理麻を大幅に設定変更いたしました。少し矛盾点があったのをご指摘くださった方に言っていただき、気がついた私の不手際ですので。それに伴い、前キャラを若干ですが身長を変更したキャラもいます。とくにストーリーには関係ないかと思いますが、一応お知らせいたします。

今後ともよろしく願います。そしてほかの皆さま方も何か矛盾点・誤字脱字などお気づきになれましたら、どうぞ遠慮なくお知らせください。感想でも活報のいつの日のところでもかまいません。

長々とお知らせをしました。

Side?」「なんでおれがんなことしなきゃ・・・」

授業が終わって、寮に戻る前に街に出ようとしていた俺に、担任の橘から保健室に行くように言われた。何故に?とも思ったが、有無を言わせぬ笑みとかそんなんを浮かべて、あの野郎・・・去っていきやがった。あいつ、ああいう容姿で生徒とよく間違えられたりしてるが、結構性格わりーぞ。小悪魔っつーか悪魔だな。他の馬鹿どもは皆だまされてんだ。で、俺はこれ以上数学の成績を下げられると留年っつーめんどくせーことになるから、仕方なく保健室に向かう。いけば分かるよとか、すっげーセリフ残していきやがって・・・なんだ、何が分かるっつーんだよ。

頭の中で橘に悪態をつきつつ、彰は保健室に来た。保健室なんか来たのは久々だ。丁度春に怪我して包帯もらいに行った以来だっただろう。特にノックも挨拶もせずドアを開ける。中にはもちろん保健医がいた。結構若い腕は確かな保健医だ。怪我が多い彰もよく世話になることがある。

「お、同室生つてお前か。」

「は?」

「橘先生が、迎えに同室生よこすねーって言ってたからさ。てつきり同じクラスの一之瀬君だと思ってたんだけど。へえ、こりゃまたおもしろい組み合わせだことで。」

こいつの言っている意味がわからないが・・・なんだろう。すっげーめんどくせーことに巻き込まれた感がある。同室生?まさか・・・

「まだ意識戻らないけど、てか寝てるだけだし。保健室も24時間

開いてるわけじゃないから。この子、連れて帰ってねよろしく！」

そういつて保健医——永倉修吾えいくわじゅごがベットを覆っていたカーテンを開いた。まあ、そこには彰が想像した通りの人物——理麻が寝ていたわけで……。

「なんで俺が……それこそ一之瀬の野郎に言えいいじゃないか。」

よくつるんでるし、懐いてるだろあいつに。

「一之瀬君はなんか用事あるとかでいないんだよ。ってことで、同じ部屋なんだし都合よくね？」

「よくね？じゃねーだろ！つか、なんでこいつが此処にいんだ？」

「プールでおぼれたって。」

「こいつ……運動音痴なのか……。」

「そうっぽいね。筋肉そんななさそうだもんね。あ、ちなみに着替えさせたの俺じゃないからって言つといて。一之瀬君だって。なれてるねーって言ったら、まあ幼馴染ですから。だつてさ。」

そんな情報いるのか？つか、着替えさせに来たならついでに連れ帰ればいいだろ。鍵だってこいつが持つてるんだし。俺が連れてく必要ねーじゃん。やべ、久々にあいつに殺意がわいた。

「ほら、そんなところでつたってないで、さっさと生徒は寮に帰った帰った。」

「まじうぜえ。」

「はいさようなら。」

こいつ……。やめた。こんな奴にいちいち腹立ててる場合

じゃねーし。

彰は盛大にため息をついた後、ベットで寝ている理麻を肩に担ぎあげた。しかしそこで修吾が異議を唱えた。

「それじゃあ、頭に血が上っちゃうだろう?」

「んじゃどーしろっつーんだ?」

「ひぎの裏と背中に腕まわして——所謂お姫様だっこで!」

「却下。つか男相手にんなことしたくねーよ。」

「大丈夫大丈夫。その子そんな男っぽくないし、何の違和感もないから!」

さりげなくこいつの事男っぽくないとか言ってるな。起きてたらこいつ怒るかしんねーぞ?ま、あの性格じゃどうだか……。

そして彰はまた盛大にため息をつき、理麻を抱え直し保健室を後にした。

寮に着くまでの間、誰にも見られなかったことが一番の幸いだと思っただ。

S i d e ? 「なんでおれがんなことしなきゃ・・・」 (後書き)

はい。今回は空気になってた彰でした。あ、まだ続きます。

保健医のプロフィールはしっかり決まり次第、登場人物ページにアップいたします。その際は前書きなどでお知らせいたしますので！

S i d e ? 「お前——だっただんな」

寮の部屋の前について、なんとかドアのロックを解除し中に入る。
こいつ軽いのが唯一の救いなのか何なのか……。それでも俺の苦
労を知らずにすやすや寝てるこいつを何度落とそうと思ったか……。
でも、それは何故が出来なくて……。

一つの疑問を抱きながら、彰は理麻の部屋へと入る。あの転入初日
に一度入ったきりだったが、それほど変わり映えはなかった。必要
なもの以外はまだ段ボールに入ったままのようで、さっぱりした印
象だ。

なんで……。ベットをアザラシが占領してんだよ……。

とか思いつつその巨大アザラシのよこに理麻を下ろす。未だにすや
すや寝ている理麻はもぞもぞとベットの上で動いて、自然にアザラ
シに身を寄せた。しばらくすり寄っていたかと思うと、また身をよ
じり彰の方に寝がえりを打った。その顔は満面の笑みである。

「自分の寝床が良いってか？なんの動物だお前は……。」

ま、俺の役目はすんだし、さっさと自分の部屋戻るか。こいつの寝
顔を眺める趣味は俺にはないしな……。っ!!？

クイツという違和感。ほんのわずかなものだが、部屋を出ていこう
とした彰の足が止まる。そして違和感のあつた腰もとに目を向ける
と、彰のズボンから出したワイシャツの裾をつかむ手が見えた。そ
してその手をたどるとその手が理麻の手だとわかる。

「なんだっていうんだ……。」

シャツの裾を引っ張り、なんとか離そうとするがなぜか離れない。ムキになってより強く離そうとするが理麻の手がただプランプラン揺れるだけである。

「何なんだこの手は……。」

仕方なく部屋から出ていくことをあきらめ、仕方なくベットのわずかにあいているスペースに腰かける。未だに理麻の手は離れていない。彰はあきれながら、後ろを振り向き、理麻の顔を見る。

そういえば、こんなに近くでこいつの顔を見るのは、あの初対面の時以来か？ あんときは確かこいつが閃夜じゃないかと思っただった。ま、でもあいつが此処来るなんて考えにくいし、そもそも眼鏡してたから違うような気もしたが……。

今の理麻は眼鏡をかけていない。よって容姿は閃夜の時と同じだった。

「こいつ……やっぱ閃夜じゃねーのか？ 族の時との印象とか口調変えてるとかはよくあるしな。」

族の活動というのは殴るとかの暴力行為。よってよく警察とかにも目をつけられる。だからこそ、外見を変える人間は多いのだ。まあ、そんなの彰は気にしていないので変えてはいない。それは閃夜も同じだった。それどころかほとんどの族のリーダーは警察からも恐れられている。

彰はおもむろに理麻のふんわりさらさらの髪の毛に触れる。いつも

ならあつたその瞬間逃げられるか、逃げられなかったとしてもちよつと距離を取られる。さらに閃夜の時だったら構わず喧嘩は避けられない。初めて殴る以外で触れたと言つても良い。

「んにゅ・・・・・・・・。」

「ぶっ・・・・・・・・これがあいつと同一人物ねえ。この世もまだまだおもしろーってわけか？」

わしゃわしゃと髪の毛をかき混ぜる。そしてふと手を止める。

「そういえば・・・・・・・・あいつにも似てるな。あいつが生きてたら・・・・・・・・こいつとそっくりだっただろうな。」

彰の脳裏にある一人の姿が思い浮かんだ。

「少し・・・・・・・・ややこしいことになったな・・・・・・・・。」

その言葉と共に理麻の手がずりりと離れた。後ろで動く気配。しばし視線外していた彰は、再び後ろと振り向く。理麻が目覚め、身体を起こし彰を見ていた。おびえることもなくしかも、はつきりと彰を睨んでいた。

S i d e ? 「お前——だっ た ん だ な」 (後書き)

あらら、ばれちゃいましたね w

こんなに早くばれちゃっていいんでしょうか (よくないにきまってる)

それと・・・あいつってだれ! ?
↑

すみません。いろいろ伏線入れるの好きなんです。

俺・理麻「んだって・・・こいつが此処にいた？」（前書き）

最近俺のほうの理麻のほうを描きやすくて好きですが、一応主人公？は僕のほうの理麻です。

俺・理麻「んだって……こいつが此処にいんだ？」

さわさわとした感触。そのたびに髪の毛がさらりと動く。毎日綺麗にされたその髪の毛は、ちよつとした風でもさらりとなびく。そんな髪の毛の動きにつられて、徐々に意識がはつきりしてくる。目が覚めて此処が自分の部屋だとわかる。隣には忌々しい邪魔でしかないでかいアザラシ。そして反対側に気配を察してそつとの方を向く。思わず叫びたくなつたのは言うまでもない。青い髪なんかそうそういない。

なんでだ……。なんだってこいつが此処にいんだ！？なんで俺はこいつの服なんか握って……。わわわ早く放せよ俺！！

バツと手を離し、すぐに体を起こす。耳がというか頭が一瞬グワンとなつたがそれよりもだ。今のこの状況が理解できない。思わず理麻はその宿敵——彰を睨んでいた。するとそれに気がついた彰が理麻の方に振り向いた。しっかりと目が合う。その状況が1分ほど続いたあと、ふつと彰の方が噴き出した。

「まじでか。ずいぶん化けてたな、閃夜。」

「……………最悪死ね。こつから飛び降りろ。」

しかもばれたとか。あーあ……。サイアク。よりももよつて一番ばれてほしくないこいつに……。

「つか、なんでお前が此処にいんだ？」

「プールでお前おぼれたんだよ。」

「……………ああ……………」

あのバカっ！いや、あのじゃないな・・・馬鹿な昼の俺！運動できないのわかってんだろぅがっ！ろくに泳げねーのになんで水泳なんか・・・ああ・・・そういや井上だか言うやつに突き飛ばされたんだっけ・・・。っやろぅ・・・覚えてろよ。

「つか、てめえ授業さぼってやがって。」

「不良やってるやつがくそまじめに授業すつかよ？え？くそまじめな優等生の篠宮理麻君よぉ？」

こんのくそやろぅ・・・。

「俺は真面目じゃねーっつの。」

「いったいどういう構造してんだよ。まるつきり別人じゃねーの？」

「企業秘密だ馬鹿野郎。さっさと俺の部屋から出てけ。」

「出てこうしてたぜ？それをお前がつかんで止めたんじゃねーか。」

「

わああああああああああああああああああ！！言うな！それを言うんじゃないよ、この馬鹿青虫やろぅ！！つかなんだって俺はこいつの服つかんでたんだ！？俺もそれ知りてーよ！！

「もういいだろ。早く出てけよ。お前の顔なんか見たくねーんだよ！！！」

「ああ、言われなくても俺だって嫌だね。見てるだけでぶん殴りたくなるわ。」

余計な御世話だ。今すぐにでもやるか？売られたケンカは買う主義だぞ。

ふんつと顔をそらせた閃夜だったが、すぐに上を向かざるを得なくなった。背中にふんわりとしたアザラシが当たる。そして、手首をベツトの上に押しつけられた。そして上には彰の姿が……。

やべ……まだ身体に力はいんねーし……それにあいつの方がちよつとだけど力上だし。あと体重重いんだよ……。

「何しやがるさつさと降りろー!」

「『t w i l i g h t』はおまえを探してる。それこそ血眼になってお前をな。」

「もう……見つけたじゃねーか。よかったな……さつさとおりるよ。」

「俺はおまえなんか探してねーよ?」

「は?お前は『t w i l i g h t』のリーダーだろ?」

「今はな?お前が一番気をつけてなきやいけねーのは俺じゃない。それだけは言つとくぜ。」

「は?」

どういう意味を持った言葉なのか、閃夜は理解できなかった。頭を働かせようとするが、再び意識が遠のきはじめてきていた。そして閃夜は再び眠りについた。

そんな閃夜の姿を見て彰は離れた。

「あの人は、それこそお前を殺そうとしてるんだからな。」

「んう……。あうあう……。」

「……。お前マジでよく分かんね……。。」

彰はようやく自分の部屋へと帰ることができたのだった。

俺・理麻「んだって・・・こいつが此処にいんだ？」（後書き）

彰がよくわかんない・・・です・・・

性格がまだいまいち・・・orz

どいう子なのよ。だれかおしえてくださ・・・いえ、自分で考えます。

というか不良なのに根はやさしいってことで。それが惚れた弱みとか？

だったらいいのに・・・

僕・理麻「あれ、僕どうしたんだっけ？」

目が覚めるといつもの自分の部屋で、アザラシに抱きついていた。

「って・・・ふおう!？」

ち・・・ちがう・・・あれだよ、このアザラシがふわふわ過ぎるだけで・・・。それに・・・こんなところにあるから・・・だから寝てるうちに・・・。

「毎朝これだもんな・・・。あれ・・・僕いつベットに入ってたけ？あれ？」

確か最後に覚えてるのは・・・そうだ・・・冷たかった。そうだが、たしか紫音君にプールに落とされて・・・。

「その後は・・・わかんないや・・・。」

とりあえず、理麻はベットから出た。水泳の前に着ていた体操着にジャージの姿で寝ていたらしく、今もその格好のままリビングへと向かう。リビングへと続くドアを開けると、ほのかにコーヒーの香りが漂ってきた。その香りの正体は同室生の彰がソファで飲んでブラックのコーヒーの香りだった。理麻がリビングにやってきた事を悟った彰と目が合う。

「あ・・・あの・・・おはよ・・・。」

「・・・もう昼だぞ？」

「え・・・がっこ・・・。」

「今日は日曜だ。」

うつそ・・・あれから三日も経ってるの？

時間の経過に思わず驚いている理麻を見て、コーヒーを一口口に含んだ後、彰はたちあがった。そして理麻のすぐ近くに来て、顔を覗き込む。

「覚えてねーのかよ。」

「プール・・・落ちた・・・くらいしか・・・。」

「ま、俺もあんま深くはしらねーけど。」

「え・・・仙・・・道君・・・授業いたん・・・じゃ・・・。」

「あっちーから途中ですぐさぼった。」

「そ・・・なんだ・・・。」

玲治なら知ってるかなあ・・・。。後で聞いてみよっかな。

「そっいや、お前眼鏡は？」

「え・・・あ・・・ん・・・僕、ホントは眼鏡いらないんだ・・・。
ある人に・・・かけててって・・・。」

「まあ・・・この部屋にいるときは良いけど、学校とかいるときは
掛けといた方がいいかもな。」

「??それ・・・玲治・・・にも言われた・・・。。ど・・・ゆこと
?」

「わかんなくても良い。」

「?????」

だからそう言われると余計気になるよ・・・。。僕の顔ってそんな変
かなあ。んー・・・どうなんだろ・・・って、あれ仙道君消えた?
え?出掛けたのかなあ・・・いつのまに・・・。。んー・・・どうし
ようかな・・・。。日曜日だけど・・・玲治いるかな・・・。。なんも

することないし・・・。

「隣の隣だったよね部屋。」

一度自室に戻り私服に着替えた。そして学生証兼鍵を取り、理麻は部屋を出た。

部屋にいた玲治に一通りの話を聞いた。けど、結局どうやって自分の部屋まで戻ったかはわかんないままだった。うー・・・気になるけど・・・鍵持ってたか入れないし・・・もしかして・・・仙道君関わってるのかな・・・でも・・・聞き出せないよ・・・まだちっとこわいし・・・ね。

そう思いつつ、玲治に休んでいた分のノートを借りて部屋で写す理麻なのでした。

僕・理麻「あれ、僕どうしたんだっけ？」（後書き）

まじめ！ノート写すのとかめんどくさいですね！↑

理麻と彰の距離はいつ縮まるんでしょうか？縮め方がわかりません。
というか、私は一体誰とくっつけようとしてるんでしょう・・・（
駄目だろうそんなじゃ・・・）

僕・理麻「あ．．．そういえば．．．いないんだっけ．．．」（前書き）

お久しぶりです！一週間も放置してました！自分でもびっくりです。

さて、今回から夏休みに突入させます！このままでは続けていけないさそうになったので。

おお．．．夏に夏休みネタを書くなんて．．．
春に正月ネタ書いてた私が．．．www

楽しんでいただける話になるよう頑張ります！
そして恋愛のほうも織り交ぜつつ．．．

僕・理麻「あ……そういえば……いないんだっけ……」

7月も後半にさしかかった。海の日、祝日の翌日であるこの日、理麻ほか全校生徒はそろって体育館にいた。まあ中には彰のようにさぼっていたり、すでに学校にいないなんて生徒もいるのだが……。

「えー……というわけで、夏の暑さに負けず、この休みの中でも己を鍛え学び、精進していくことを心掛け、健康で過ごし、またここで皆さんの元気な姿を……。」

と、さつきから繰り返すように言っている校長先生の話。

そう、今日は碧條学園の夏休み前の終業式だった。

ただでさえ長い校長先生の話だが、この時はさらに長く感じられる。もうすぐそこまで来ている夏休み。なのにこの話がそれを妨害する。一体何のいやがらせだろうか。

気がつけば、校長は一人で30分も話していた。そのせいで時間が押し、式はその他省略もあったが無事に終わった。教室に戻り、いらない成績通知表をもらう。担任の橘の話が簡潔に終わり、委員長の号令により、理麻たちは夏休みを迎えたのだった。

「紫音、悠。お前らは夏休みどうすんだ？」

生徒でこつた返す廊下で、玲治が二人に聞く。理麻は人ごみに押しつぶされそうになりながら玲治の制服を握って何とか流されないようにしてるので精いっぱいだった。

「俺は、一度家に帰るんだ！顔見せないとうるさいしな！」

「僕もね。ただ、8月に行ったら海外行くから会えないかな。」

「お前のとこ毎年そうだもんな。今年はどこ行く予定だ？」

「オーストリア。本場のオーケストラとかオペラ見るんだって。お土産買ってくるから。そういう玲治と理麻は？」

「俺は多分家でゴロゴロ。うちの親に夏休みなんてものはもはや存在してねーし。……そーいや、理麻。」

「な……に……？」

急に話に入れられた理麻は、相手が玲治だったのにもかかわらずきよどつてしまった。

「おじさんもおばさんも今フランスだろ？帰ってきてんのか？」

「そんな連絡ないよ……。たぶんまだ……。」「

フランスでお仕事かなあ……。あ、僕のお父さんは一流ファッションメーカーの社長さん。最近知ったんだけど、この学園の制服もお父さんの会社のなんだって。お母さんは実はファッションデザイナーなんだって。つまりこの制服はお母さんデザインってわけらしいんだ。

「そっか……。ぼくひとりなんだ。」

「お手伝いさんとかいないの？」

「い……。いるけど……。あんまり話したことないから……。」「

「それじゃー自分の家にいるのにあんま落着けないなー！」

紫音君の言う通りだよ……。あう……。どうしょ……。

「俺の家来るか？俺の親なら理麻そこそ慣れてるだろ？」

「玲治の家？」

「理麻の家よりちよつとせまいけどな。部屋も空いてるし。理麻ならうちの親もすぐにうなずくだろうし、な。どうだ？」

「ん……。玲治の家ならうちの親もいって言うから……。行く。」

「あ、玲治の家ならおれ知ってるから今度遊び行くな！理麻にも会いたいからー！！ぎゅーってしにいくな！」

「ふよ……。」。

「今抱きつかないの。じゃ、理麻に連絡したかったら玲治経由でいいんだね。」

「そうだな。じゃ、うちに電話してくるからまたあとでな。」

一度玲治と別れ、僕らは寮に荷物をまとめに行った。

僕・理麻「あ．．．そういえば．．．いないんだっけ．．．」(後書き)

終わらないかと思いました。

これでも短くしたほうです。長い長い．．．。

僕・理麻「電話ドキドキ・・・」(前書き)

久々にあの二人を書きました。

しかも暴走してます。誰がでしょう。

僕・理麻「電話ドキドキ・・・」

荷物は必要そうな着替えとか、所謂お泊りセット？だけ。まあ、僕の家と玲治の家は近所だから何か必要になつたら取りに行けば良いよね。

・・・あ、お父さん達に電話しなきゃね。でも僕携帯音痴だからな・・・。たしか寮の管理室に電話借りれるんだよね。・・・だ・・・大丈夫。清水先輩いい人だから・・・一人でも大丈夫。

というわけで、理麻は管理室にやってきた。窓口つぼくなっているところの硝子をこんこんと叩く。するとすぐに窓があいた。

「あれ、篠宮君。どうかした？井上に部屋でも壊されちゃった？」
「そ・・・じゃないです・・・。あの・・・電話貸して・・・欲しいです・・・。」

「電話ね。はい、ここにあるの使って。」

「これ・・・海外にも・・・。」

「繋がるよ。電話終わつたらそのままにしてって良いからね。声とかもかけなくていいから。じゃ、ごゆつくりー！」

そついつて清水先輩は管理室の中に戻って行った。ペコツと頭を下げた理麻は転校初日の朝、教えてもらった通りに電話をかけた。

『はい？』

「お・・・お父さん？」

「なんだ理麻か。久しぶりだな。元気にしてるか？」

出たのは父、一麻だった。取りあえず、母親じゃなくて一安心の理麻。

「あ・・・あのね。夏休みのことなんだけどね。」

「そっか。もうそんな時期か。ごめんな、帰ってやれなくて。」

「うん。お仕事頑張っで。でね、夏休みの間玲治の家にお世話になろうかなって思っただけど・・・。」

「あちらがいいなら。理麻のすきなようにすればいいよ。」

「うん。わかった。だから何か連絡とかある時は玲治の家にして。」

「そうだね。じゃ、あんまり迷惑かけ・・・。」

「あなた！！！」

（（びつくう！！））

思わず突然の声に二人の男はびつくりした。

この声って・・・はあ・・・なんか電話長くなりそうだな・・・。

「あなた？お仕事中に誰とお電話してるの？」

「理奈・・・可愛い子とだよ。」

「お父さん？」

「私より可愛い子ですってえ？ちよっとおよこしなさい！！（ガタガタ）ちよっと！私の旦那にちよっかいだすのはどのどいつなの！？」

「お・・・お母さん・・・久しぶり・・・。」

「・・・。。。。。。。。。。。」

「????????お母さん？」

「理麻ちゃんーーーー！！！！」

お母さん・・・耳がきーんてするよ・・・。

「んもう！！あなたも理麻ちゃんなら理麻ちゃんだって言ってよね
！！」

「だから可愛い子だっていったらう？嘘は言っていないだろうに。」
「そりゃまあ・・・理麻ちゃんは世界一の可愛さ持ってるもの。理
麻ちゃんー、元気なの？全然電話くれないから私寂しかったわー
！！！！」

「ん・・・ごめんね。大丈夫、元気だよ。玲治とねクラス一緒だっ
たし、友達もできたし。」

「ま！玲治君と同じクラスなのね！で？」
「で・・・って？」

「なにか進展とか、イベントとか起きなかったの？」
「イベント？進展って？」

「理奈！理麻に変なこと吹き込まない。」

「変なことじゃないわ！立派な萌えよ！！理麻ちゃん、私玲治君に
なら理麻ちゃんお嫁にだしても良いわ！！」

「ええ！？」

「理麻、玲治君の家に夏休みの間泊まるそうだよ。」

「お・・・お父さん！！」

「あら！そうなの！！なんて素敵！！早速楓ちゃんと連絡取らな
きゃねー！！じゃ、理麻ちゃん。いい報告、期待してるわー！！」

がちゃん！！

プープープー・・・

「何の話しだったの後半……。楓ちゃんて玲治のお母さんだよね・
・。なんで連絡とるんだろ……。いつも以上にテンションおか
しかったし……。あ、もうこんなじかんだ……。玲治待たせちゃ
うな。」

理麻は一度寮の部屋に戻り鞆を取って来ると、学園の待ち合わせ場
所である学園の正門前に向かい、すでにいた玲治と共に迎えに来た
玲治の家の車で玲治の家に向かった。

僕・理麻「電話ドキドキ・・・」（後書き）

理麻のお母さんは所謂婦女子（貴腐人？）ですね。

自分の息子（理麻）で楽しく妄想にふけてますねw

ちなみに玲治の母もお仲間ですね。だから連絡とって泊ってる間の事を聞こうとしてますねw

さ、楽しい夏休み、次回からいよいよ始まりますね！！

僕・理麻「玲治のお母さん・・・あう・・・。」（前書き）

理奈（理麻の母親）以上に元気な玲治の母親登場！

僕・理麻「玲治のお母さん・・・あう・・・。」

玲治の家は、車で学園から20分ほどのところにあるんだ。僕の家とは歩いて数分のとこ。そんなに離れてない。玲治の家は、とあるお菓子メーカーを経営してて、玲治のお父さんが社長さんなんだって。僕もよくお菓子もらったりする。新発売のお菓子をいち早く食べれるのは凄くうれしい。

「たぶん、あいつは帰ってきてるな。昨日終業式だったらいいし。兄貴は・・・帰ってこなくていい。」

ええー。いきなり帰ってくるなって・・・。一之瀬家は三人兄弟で長男の龍治さんは今大学生。それから次男の玲治。あと妹の友梨ちゃんがいるんだ。ちょっとうらやましかったりね。僕一人っ子だし玲治見ると、すっごい楽しそうだなって思う。さっき言ってたあいつってというのは多分妹の友梨ちゃんのことだとおもっ。

ガチャツと玄関のドアを玲治が開けて中にはいった。僕もその後ろからちゃんと「お邪魔します」と言ってから中に入った。玲治の家は普通の洋館。この現代に洋館？とか思うよね。でもぼくんちも同じような洋館だから、これがあたりまえって思っちゃう。普通の家のほうが僕は好きだけだね。いいじゃん、家族しかいないでのんびりできるんだから。

「ただいまー・・・つつつてもいるわけね・・・っ!？」

「お帰りー!!理麻君!!」

「ふうわあっ!？」

あ……なんか甘い香りする……。じゃなくて……。！！！！

「か・・・楓さん・・・苦しいです・・・。」

「お帰りなさいー理麻君！！ああーやつぱかawaiiわあ！！」

「おい、実の息子は総無視か？」

「あら……いたの？」

「ひでつ!!」

そう、この玄関に飛び込んで今僕をぎゅうぎゅうしてるこの人こそ、玲治のお母さんの一之瀬楓さん。僕のお母さんとは中学からの親友で、お仲間？らしいんだ。きれいな亜麻色のロングヘアーにきれいな琥珀色の瞳。日本人なのに全然そうは思えないほどきれいな人なんだよ。玲治がかつこいい顔立ちしてるのもうなづけるよね。僕は平凡だけどさ。あの学校の生徒の親とかも皆美形なんだろうなあ。

「あの……楓さん……そろそろ……あの……。」

「あら、私としたことが。こんなおばさんに抱きつかれてもうれしくないわよね。」

楓さんは全然おばさんなんかには見えません。

「あの……夏休み中、お世話になります。」

「理奈ちゃんから話は聞いてるわ！もう、理麻君なら夏休み中だけじゃなくて毎日いてほしいのに！！ま、そんなこと言つと理奈ちゃんに怒られちゃうけどね。さ、入って入って。玲治もお帰り。いい仕事したわね！！」

「ただ理麻を誘っただけだろ。」

「それがGJだって言ってるのよ。玲治、私これから会社呼び出されちゃって行かなきゃいけないの。夜遅くには何とか帰ってくるわ。お夕飯は任せてあるからね。」

「おい、お手伝いは全員夏休み取らせたとか言っただけだか？」

「ええ。誰もいないわよ。」

「じゃ・・・誰にだ？」

「それは後でのお楽しみ！私がいなくて理麻君に変わったことしちゃダメだからねー！！」

「誰がするかなぁー！！」

「???」

「じゃ、理麻君。自分の家だと思ってくつろいでね！いつてきまーす！！」

さっそうと、楓は迎えに来ていた車に乗り込んで、会社に行ってしまった。

「嵐みたいだな・・・いつもながら・・・。」

「元気だよ。」

「そうおもってるならいいや。今から部屋案内するから。こっち。」

「うん。」

玲治に案内され、理麻は二階へと上がった。

僕・理麻「玲治のお母さん……あう……。」（後書き）

次は、玲治の兄妹ですかね。

僕・理麻「くまさんはいないよ。」（前書き）

初の女の子キャラ登場です！

え、BLなんだから女の子いないだろって？

この子がいい働きするんですよいろいろww

僕・理麻「くまさんはいないよ。」

僕の部屋は2階にある客間の一室。一人には少しおつきすぎる部屋。家具は一通りあって、そして……。うはぁ……。フッカフカのベットだよ！広いよ。シングルだけど！それに、あざらしもない……。って。

「なにこのくまさん……。え……。くまさんだよね……。くまさん……。」

ええ〜なんでくまさんいるの〜？

あるーひ、森の中、くまさんにー……。」

ベットの upper を占領するのはベットの上にいると理麻と頭の位置が同じになるほどの大きさのくまさん（テイベア）だった。抱っこすると理麻のほうじゃつかんふらふらする。なかなかおもしろい。そのまま理麻は二つはなれた玲治の部屋へと向かう。こんこんと、くまさんの鼻でノックする。ドアを開けた玲治が驚かないはずがなかった。

「うおって……。理麻か？」

「ん……。ねえ玲治、このくまさんなあに？」

「（なにこれかわいい）……。」

何が可愛いって、理麻だよ理麻。なんだこのシュチュ。くま抱えて首かしげてるなんて……。反則だろ！！

「玲治？」

「・・・あ・・・ああ・・・そのくま何。部屋にあつたのか？」

「そう。・・・んしょ・・・。ね・・・なんか知らない？」

「とりあえずそれ俺が持つわ。貸して。（いろんなみでやばいから）」

「はい・・・。「あ——！！なんでお兄ちゃんがもつちゃうのお！？」びつくう・・・！！？」

廊下に響く高い声。そして、その廊下の向こう側から全力疾走でこちらにやってくるのは、この家の長女で玲治の妹、一之瀬友梨だった。

「そのくま、私が理麻お兄ちゃんにあげたのに！！」

「おまえかやつぱこれ。つか、理麻こんなのいるわけねーだろ。」

「いるもん！理麻お兄ちゃんのパパが言ってたもん！！」

「お母さんが・・・？」

「理麻お兄ちゃん、ぬいぐるみさんに抱きつかないと寝られないんだって！！」

「ぎゃあああつー！！」

お母さん何言ってるのぉ！？そんなわけないからっ！！

「あと、理麻お兄ちゃんがくまに抱きついて寝てるとこ忍び込んで写メ撮りたいの！！それで私の友達に送るの！！それで萌えを語りまくるの！！」

「そっちが本音か！！（んなもんお前に見せるかあほお！！）やつぱこれはおれが預かる！つか、兄貴の部屋にぶち込むからな！！」

「やだぁ！！龍治お兄ちゃんじゃ萌えないっ！！」

そ・・・そういう問題じゃないと思うな・・・。もえ・・・てなに

？って言うかさ・・・二人して僕挟んで言い合いするのやめて――
――！！うっ・・・友梨ちゃんも僕より背高いもん
ね・・・。うっ・・・。

「ふ・・・ふたりとも・・・けんかよくないから・・・やめよ？ね
？」

「うっ・・・。」

「理・・・理麻お兄ちゃんかわいい――！！」

「ふによ！？」

ギュッと抱きついてきた友梨に理麻は顔を真っ赤にして驚いた。玲
治はあっけにとられている。

「もうかわいすぎて困るう！！理麻お兄ちゃん、私のお嫁さんにな
ってえー！！」

「え・・・ぼくが・・・お嫁さん・・・！？」

「そう、理麻お兄ちゃんは私の嫁！！」

「はいはい、そういうのはお前のオタ友とかいうやつらとしろ！理
麻を巻き込むな！これはお前が抱いて寝てろ！はいさようなら！！」

「うわーん、お兄ちゃんサイテー！！理麻お兄ちゃん！お夕飯一緒
に食べようね！じゃーね！！」

「う・・・うん・・・またね。」

くまさんを引きずっていく友梨を二人は見送ったのだった。

僕・理麻「くまさんはいらないよ。」（後書き）

長いので、きります。

妹は恋愛対象には入りませんので。完全なるBL作品ですので。
ご安心を。↑？

にしても、玲治は声には出さないけど、内心いろいろ考えてますね。
悶絶してますね。もつとくるしめ、理麻のかわいさに！！なんてい
つてみたり・・・すみません。

僕・理麻「においにつられて・・・ふらふらぁ」(前書き)

さて、これを出したいキャラは一通りですかね。

僕・理麻「おいにつられて・・・ふらふらぁ」

荷ほどきを済ませた僕は、ふらふらつと玲治の家を歩く。さつきからね、なんか甘い香りがするんだよ。このにおいは・・・あれだよなあれ。僕でも作れるあのお菓子だよ。

「ふっわふわの・・・あ！やっぱり!!」

僕は見つけた！ダイニングの机の上にある出来立てなのか湯気ももうと上がったそれを！お皿の上に三段乗せにされてて上にちよこんとバターが乗っかってさらに黄色いはちみつたっぷりのは間違いない！

「ホットケーキだぁ・・・うわぁ・・・おいそ・・・」

お・・・おなかへってきたかも・・・おいしそうだなぁ・・・食べたい・・・食べたい・・・けど人の家だし・・・誰かのか分かんないし・・・だめ・・・だめ・・・だめだけども・・・

「あう・・・たべちゃいたい・・・」

お皿の横に置かれたフォークに勝手に手が伸びていく。だがそんな理麻を後ろから止めた人がいた。

「はい、ストロープ！これでまだ完成じゃないんだな。」

「ふえ・・・？」

がしつと後ろから理麻を抱き込んで手を止めさせたその人はアイス

クリーム屋でよく見る、あの丸い独特のスプーンで、お皿のあいていたところに真っ白なバニラアイスを乗せた。すぐにホットケーキの温かさでとろりと溶けだす。

「うあ．．．おいしそ．．．。」

「はい、これで完璧。食っていいよ、理麻。」

「え．．．これ僕の？龍治さん。」

ぐいっと首を後ろに倒す。頭が後ろにある胸に当たる。そしてその上にあるのはこの家の長男の龍治の顔。

「お前がいるってくそｂ．．．母さんに聞いたからな。腹減ってたんだろくいしんぼめ。」

「う．．．これ見たらすいただけ．．．。龍治さん料理上手だもんね。」

龍治さんはお家柄なのか、料理全般が得意。特にお菓子の腕はぴかー。このホットケーキも、市販のミックスは使っていないで小麦粉とか自分の配合で作ってる。味はもちろんおいしに決まってる。理麻はそそくさとホットケーキが置かれている前にある椅子に座る。そして器用に切り分けてぱっくんと口に運ぶ。

「おいひい．．．。」

おいしいの食べるとほんとに自然と笑顔になっちゃうよねえ．．．。うん、さすが僕の好きなデザートトップ５に鎮座してるだけあるよね。あ、前会長さんにもらったプリンもトップ５に入ってるんだよ。トップ５のうち、３つは龍治さんの作ったのだったりするほど、龍治さんの作るお菓子はおいしい。僕も自分で作れてらなあ．．．。って、太っちゃうか。

「相変わらずうまそうに食ってるよなお前は。ちびなのも相変わらずだけどな。」

「むう・・・龍治さんとか玲治がおつきいだけだよ。僕は平均なの。」

「男子高校生のじゃなくて女子高生のな。」

「ぶう・・・。」

「なるほどなー。母さんが言ってた夕飯頼んだって兄貴だったのか。一個もらい！」

「ああー!!！」

理麻が切り分けたうちの一つを、今来たらしい玲治がつまんで口に運んだ。すでに二枚目も半分が無くなったところである。未練がましく理麻がそれを目で追った。

「玲治それ僕んの!!！」

「どんだけ食うんだよ。一切れいいだろ。なんならアイスも食っちゃまうぞ。」

「やだっ!!！」

「相変わらずだな。そうだよ、今晚はおれが夕飯係。そっぴや、何がいいか聞いてなかったな何がいい？」

「なんでもいいぜ？」

「ハンバーグに、オムライスに、ナポリタンに、えっと・・・から揚げに、肉じゃがに、それから・・・。」

「理麻ストップ！」

「ふえ？」

「やめて。それはおれでも死ぬわ。食堂で頼むんだな、学校の。」

「ええ・・・まだ半分なのに・・・。」

「「はんぶつ・・・。」」

仕方なくハンバーグに決めた。ちやつかりデザートを要求するのは
忘れないよもちろん。うわぁ・・・夕飯が楽しみだなぁ！

僕・理麻「においにつられて……ふらふらぁ」（後書き）

龍治さんは食品関係の大学に通ってます。将来は家を継ぐそうなので。

玲治はその点だと気楽ですね。

最初、理麻が龍治と話するとき敬語にしようかともったんですが、やめました。

龍治＆玲治とは幼馴染という昔からの付き合いがあるので敬語はあると変かなと思ったからです。それでなくても先輩とかいるから敬語理麻君多いのに……

龍治は理麻の胃袋すっかりキャッチしちゃってますね。

僕・理麻「…………え…………それってばくも？」（前書き）

あ、前話のここを出したいキャラ全部出せたとか言っていましたね。
生徒会の会計兼書記まだでてないけど……

出したくないわけじゃないんですけどね。たぶんw
いつかでするので。たぶんw
↑

僕・理麻「…………え…………それってばくも？」

おいしいご飯と快適な空間で、それなりの夏休みを過ごしてた僕たち。今はリビングで玲治と友梨ちゃんと宿題してるんだよ。まじめだなって？だって一緒にやらないと玲治はさぼってばっかだもん。友梨ちゃんはそんなことないと思うんだけどなあ……。

「んで、ここにそれを代入して、さらに足してね。そしてここを……。」

「できたあ！！すごいすごいー！さすが理麻お兄ちゃんだよ！」

「そりゃ、主席だもん。つか、何でお前が教わってんだよ。」

「理麻お兄ちゃんに教わるなんてめったにないからだよ！いいじゃん、お兄ちゃん。はさ、学校でもどこでも教われるんだもん。ずるい。」

「ずるいつてなんだ。つか、お前そんな頭悪くねーんだろ？」

「お兄ちゃんだつて。」

うん……玲治はそんな頭悪くない。終業式の日こつそり後ろから成績表盗み見たけど（あ、内緒だよ。だつてずるいじゃん、玲治は僕の成績知ってるのに僕は知らないんだもん。）、悪いどころか平均以上。ちよつと古典が低かったけど、それでも平均よりは上だもんね。てことは、友梨ちゃんもそうなのか……。

ブブブブブツ

「ん、電話？だれだろ。って…………紫音？」

「紫音君？」

玲治の携帯が振動し、電話がかかってきたことを知らせた。玲治が携帯を取り出して、開くと画面に紫音の名前が表示されていた。

「もしもし、なんだ？」

『久しぶりだな！』

「ああ、そうだな。で？」

『でってなんだよ！あのな、海いこうぜ！隣の市のさ。』

「海ねえ……。俺はいいけど……。」

『理麻があれだつて言うんだろ？でも理麻、浮き輪あるならなんとかなるとか言つてなかったっけ？』

「……。ちよつとまってる。理麻、シオンが海いかねーかって。」

「う……。海……。」

ええ……。海。そりゃ行きたいけど……。でも泳げないし……。

「海つて聞いた瞬間顔が曇ったぜ？理麻のやつ。」

『ええー。なあなあ、ちよつと変わってくれよ。』

「ん……。理麻、紫音が変われつて。」

「……。もしも……？」

『理麻ー！なんでだよ、行こうぜ海。行きたくないのか？』

「い……。行きたくないわけじゃないけど……。泳げないし……。」

「

『浮き輪使えばいいんだろ？だめなのか？』

「ん……。そりゃ浮き輪あるなら、海入れるけど……。でも……。」

「

『海の家で、なんかおごるからさ。どうだ？』

「（ぴくつ）行く！」

「ちよつとまでえい！！おいてめえ、紫音！！今絶対食べもんで釣つたな？」

『あ、ばれた？でもいいじゃん。行くって言ったし。てわけで、今度の土曜な！現地集合で！10時な！あ、理麻に浮き輪は持ってこなくても俺持つてくからいいよって言っというて、じゃー！』

「おいしいい！！って、切りやがったあの野郎……。」

「紫音君、なんて？」

「浮き輪は持つていくから理麻はもつてこなくていいと。土曜の10時に現地集合だと。」

「紫音君なんか生き生きしてたね。」

「なんかやなよかんするのは気のせいかな？」

「えー理麻お兄ちゃん、海行くのー？友梨も行きたいー。」

「お前は今度の土曜、友達とでかけんだろ？残念だったな。」

「ううー……。」

海かぁ……。何食べよう。

僕・理麻「……………え……………それってばくも？」（後書き）

夏といえば海ですね。

いえ、私はプール派ですけど。海水は少し苦手です。あと砂浜熱いので。

そして、元気はつらつの紫音君。元気でいいですね。いっそうつとおしい……。

さて、次回はいいよ海ですね！

s i d e ? 「ちょっとこっち来ようか？」（前書き）

ちょっと気分を変えましょうか。目次がもう僕・理麻ばかりなので。
? っ て な っ て ま す が 、 玲 治 視 点 で す 。

理麻の心臓は止まりそうですw

side? 「ちょっとこっち来ようか?」

学校を出たのが、8時半過ぎ。そこから電車とバスを乗り継いで、10時少し前によく目的の海水浴場へと到着した。こんな時間にもかかわらず、すでに駐車場や、更衣室は人であふれている。まったく、この暑いのにご苦労さん。って、俺もそうか。理麻と二人で水着に着替えて紫音と落ち合う予定の海の家に向かう。すでに開店準備万端のそこはいろんなメニューが書かれた紙が風になびいて揺れている。アー・・・なんか腹減ってきた。俺もなんだから、馬鹿みたいに食う理麻なんかたまねーだろ。ほら、いまだってメニューが揺れるのと一緒に頭が動いてるぞ。で・・・でだ。

「紫音の野郎はどこだ?」

「そ・・・いえ、いないね。」

理麻、お前もうすっかり紫音のこと忘れてたろ。海よりもお前はこちのおいしいもののほうがいいんだもんな。

「玲治―理麻―!!」

「って・・・そこにいたのかよ。」

「ふぎゅ!?!」

海の家から現れた紫音は、水着にエプロンつけて現れ、恒例のごとく理麻に抱きついた。いろいろ突っ込みたいが、あえて一つに絞ろうか。

「なんだそのカッコ・・・。」

「なにつて、海の家で手伝うんだからするに決まってるだろ?あ、玲治と理麻の分もあるからな!」

「は？」

「え．．．え．．．？」

何を言った今、こいつは．．．．。え、海の家で手伝う？手伝うって．．．．え？

「おい紫音、てめえちよつとこつち来ようか？」

「ひぎゃあああああ、玲治顔怖いー！！理麻ーたすけてー！！」

「え．．．．え．．．．！？」

「理麻はいいんだよ。お前だお前！！」

ということ、俺は紫音を引つ張ってなるべく理麻から離れる。理麻の前じゃ、どすの利いた声は出せないからな。

「で？どういふことが教えるよああ？」

「玲治、顔。マジになってない？」

「事と次第によっちゃあ、さらに豹変するぜ？で？手伝いつてのはなんだ。聞いてねーぞ。」

「言つてねーもん！」

「なんで俺らがここの海の家手伝うんだよ？」

「此処の海の家な、俺の家が経営してんの。だから、俺も手伝つてんの。で、どうせ玲治たち暇だろうなーってことで呼んだんだよ！」

「それは暇だけだよ。俺はともかく理麻はどうすんだ。接客なんかできっこねーぞ？」

「理麻には裏方やつてもらえばいいじゃんか。接客はおれと玲治でいいだろ？な、お願いだよ。後退の人が来るお昼まででいいらしいし、そつから遊べばいいだろ？」

んー．．．まあ、そういうことならいいのか？まあ、俺はいいんだけどさ。問題は．．．．あの後方でやや放心気味の理麻だな。

「理麻、お前裏方ならできるだろ？」

「裏方・・・？」

「注文来た料理とかドリンク用意すんの。注文とかの接客はおれらがするから。な、それならどうだ？」

「・・・ん・・・わかった。やるよ。」

「ありがと理麻——！！大好きだあ——！！」

「ひぎゃあ——！！」

お前抱きついたりして暑くねーのかよ。あー・・・海入りたい・・・。
。。

side? 「ちょっとこっち来ようか?」 (後書き)

ということ、海でバイトです。

ちなみに私は海でバイトなんかしたことないので、想像で書きます。こうかなあってかんじです。実際とはおそらく異なると思うのですが、ご了承ください。

理麻は接客なんかできませんね。おどおどしちゃって。

改めて紫音がうっとおしいです……。あと、抱きつきすぎw

僕・理麻「わ・・・わわ・・・意外と忙しい・・・」(前書き)

あれ、夏終わっちゃいましたねw

まあ、まだ暑いので夏の話書いてもいいですよね？

あと。最近海の家行っていないというか・・・海自体に行っていないので海の家で何売ってるかあいまいです・・・

僕・理麻「わ．．わわ．．意外と忙しい．．」

日が昇っていくにつれ、海に来る人の人数は急激に増し、理麻たちが手伝っている海の家にも多くのお客が訪れていた。理麻たちがいる海の家はそれほど大きくもないのだが、いい立地なのか客足が多かった。一応厨房を理麻が担当。接客と理麻のフォローを玲治と紫音という形で行うことにしたのだ。最初は慣れない作業に戸惑っていた理麻だったのだが、次第に慣れてきたのか二人が接客してきたメニューのものを作ることができるようになっていた。交代の間まであと一時間と迫ったころだった、カウンターのほうからお客さんの声が聞こえた。だが、玲治と紫音どちらかが接客している様子はない。いまだにその人は「すみませーん」と声をかけてきている。そこで理麻は思いだした。二人ともいないことを。玲治はパラスルの貸し出しのためにお客さんに説明しに行った。紫音は紫音で迷子を近くの保安所に連れて行っている。つまり、今理麻は．．．。

「ひ．．．一人だよ．．．」

どどどど．．．どうしょ．．．。で．．．でもお客さんだし、無視しちゃだめだよね．．．。大丈夫．．．注文聞くだけ．．．。

そう思い、理麻は意を決してカウンターへと向かった。そこには一人のあまり年も変わらぬ男の子がいた。天井付近にぶら下がったメニューを見上げている。

「お．．．お待たせしました。いらっしやいませ．．．」

「あ、よかったお店の人いた。えっと．．．とりあえずかき氷三

つ。味は・・・いちごと・・・ブルーハワイ・・・それとレモンね。

「はい・・・。」

「それと、焼きそばと・・・あ、たこ焼きもあるんだ。じゃ、それもひとつね。あとおでんもください！」

「かき氷と・・・焼きそばと・・・たこ焼きと・・・おでんですね。かしこまりました・・・出来るまで少しお待ちください・・・。」

たどたどしくも理麻なりに接客できたことに自分自身安堵していた理麻。いそいそと奥に戻ろうとしたとき、そのお客さんが自分のことをじっと見てきていることに気がついた。思わず理麻も見つめ返してしまう。遠くからでも目立つだろう赤い髪の毛、一般的な黒い瞳。両耳にきらめく青いピアスをしている。

「もしかしてさ・・・理麻ちゃん？」

「え・・・え・・・？」

「君、高校2年生でしょ？」

「そう・・・ですけど・・・。」

「学校、碧條学園で最近転入してきたでしょ？」

「そ・・・です・・・。」

「やつぱり。うちの馬鹿副会長が言ってた理麻ちゃんって君なんだ。やつと会えたよ！あ、俺のこと知らないよね。俺生徒会会計兼書記の石川悠吾いしかわゆうごていうんだ。2・Bだからめんしきないけど。あ、タメでいいから。へー、こんなところで会うなんてね。バイト？」

「手伝い・・・みたいなかんじ・・・。友達の・・・。」

「そうなんだ。あ、理麻でいい？」

「うん・・・。」

「俺は自由に呼んで。んーじゃーね・・・かき氷のブルーハワイにさ、イチゴとメロンのシロップ掛けてくれない？」

「え？」

そんなことしたら恐ろしい色になっちゃうよ？

「いいから。で、その特性かき氷とたこ焼きとおでん。そっちの休憩スペースで寝転んでるさばり大魔王に持つてつてくれないかなあ。後のはおれ浜辺に行つて食べたいから。まだ泳ぎ足りないし、ね？」

「わ……かつた……。」

そういつて理麻は奥へと行きささつと注文の品を作っていく。やはり特性かき氷はものすごい色をしている。混ぜたら危険そんな気配さえある。大丈夫なんだろうか……。それぞれの書品を二つのお盆に分けて載せカウンターに運ぶ。

「うつはは、上出来！やばいね、これ。あ、これ代金。お釣りいないよ。それ俺のお金じゃないしね。」

「え……。？」

「んじゃ、よろしくねー！」

そう言つて悠吾は自分の分のお盆を持つて行つてしまった。理麻は残ったお盆とその上の怪しげなかき氷＋たこ焼き＋おでんを見つめて、それから気を取り直して休憩スペースとなっている所へ向かった。

あ……。あれ……。あの人……。知ってる……。だつて……。金髪つて珍しい……。なんかすごい存在感あるな……。

規則正しく並べられた机のとある間にごろりと寝そべる金髪の男。

間違はなく生徒会長だった。あまり泳ぎに来ているような感じはない。ずっとここで寝そべっていたという感じた。理麻はとりあえず会長がいるところに一番近い机におぼんをおいた。するとその音に反応したのか、生徒会長が体を起こした。

「悠吾てめえ．．．いつまで待たせ．．．お前は．．．。」

「こ．．．こんにちわ．．．。」

「なんでここにいるんだ．．．？」

「えと．．．お手伝いです．．．。会長さんこそ．．．。」

「俺は．．．あのうざい歩に引つ張られて無理やり．．．。」

どうやら副会長さんもいるようです。

「つて．．．んだこのかき氷．．．。」

「えつと．．．悠吾君が．．．。」

「あいつか．．．。」

ああ．．．。会長さんの眉間にしわが．．．。こ．．．。こわいよ．．．。

僕・理麻「わ・・・わわ・・・意外と忙しい・・・」(後書き)

まだ続くっていうねw

隼人(会長)の口調がわかんないです。

あとやっと出せた悠吾。これで出したいキャラ全部出せました!!!!!!
どれだけかかったんですかね・・・

海の家編はもう少し続きます。

僕・理麻「だって・・・ひりひりするもん」(前書き)

更新の曜日変更しました。

皆様にはいろいろご迷惑おかけします。

9月中はこれで行きます。おそらくもう変わりませんが。

最近、理麻がおどおどしてません・・・もっとおびえろ↑

僕・理麻「だって・・・ひりひりするもん」

海で遊ぶにぎやかな声が海の家の外から聞こえてくる。そして目の前には・・・ふきげんになっちゃってる会長さん。ちょっと怖いよ。玲治まだかな。紫音くんでもいいから・・・。

この場合、玲治が来たらさらに怖くなることを理麻は知らないのです。

かき氷に刺さったスプーンを持ち上げながら、隼斗は横目で理麻を見る。今の理麻はいつも通り眼鏡着用、日焼け防止のパーカーに着、その上に此処の指定エプロンをつけている。特性かき氷をひと匙掬いつつ、隼人は思ったことを口にした。

「暑くねーのか？」

「え・・・？」

「眼鏡してるってことはあんま泳ぐ気ねーだろ？それにそんなパーカー着てたら暑くね？」

「確かに・・・泳ぐ気はそんなに・・・でもパーカーは着てないと日焼けしすぎてひりひりしちゃうので・・・。」

すぐにね、真っ赤になっちゃうんだよ。ひりひりしてお風呂入ると痛いからね。いやだよ。

「お前真っ白いもんなあ？チツ・・・これじゃあ何の味だかわかんねーよ。悠吾のやろっ・・・。」

「あはは・・・っえ!？」

スプーンを持っていないほうの手で、隼人は理麻の眼鏡を外した。

いきなりの出来事に、理麻はただ眼を丸くするだけである。そんな理麻を見て、隼人はふっと笑った。

ああ・・・思った通りだ。こいつそっくりじゃねーか。あいつ・・・とあいつに・・・。

「か・・・会長さん？」

ことりと理麻の眼鏡を机の上に置き、ずいっと理麻のほうに身を乗り出す。鼻同士がつきそうなほど近くにである。

「え・・・え・・・？」

「お前、そっくりだな・・・。」

「だ・・・誰にですか？」

「俺の一番大事だったひと。そして、俺が一番許せない人。」
「??？」

いや・・・目の前にいるこいつは・・・おそらく前者だな。後者のほうは・・・似てるやつなんかないんじゃないか、あんなやつ。

じりじりと、理麻が後ずさりしているのを知った隼人は、すぐに理麻の腕を掴んで逃がさない。

「逃げるなよ。しばらくここにいろ。」

「な・・・んですか・・・？」

「なんとなくだ。たこ焼き食っていいから。」

「（ぴくっ）」

「いきなり目を輝かせるなよ。ほら、食え。俺はおでんだけでいいし。」

「じゃ・・・遠慮なく・・・いただきます!」

つまようじをつまんで、理麻はたこ焼きを一口まるまる口にほお
つた。

僕・理麻「だって・・・ひりひりするもん」(後書き)

あれ、若干隼斗視点・・・。

そろそろ夏を終えたい・・・。

僕・理麻「なでなで・・・」(前書き)

まだ夏は続いています。

いい加減新学期に入りたいです。

タイトル、一応僕・理麻になっていますが、若干隼斗視点も含んでいます。

僕・理麻「なでなで……」

たこ焼きを半分ほど食べ、さらに残りのたこ焼きを食べようとつまようじをたこ焼きに突き刺す。大きな口を開けて、丸ごと口にほおり込む。口の端に付いたソースをしたでぺろりとなめとる。食べるたびに満面の笑みになる理麻を隼人は傍らで眺めていた。奇怪なかき氷を食べながら。

「プリン食ってた時もそうだけど、お前食ってる時が一番幸せみたいな顔してるな。」

「あのプリン……おいしかったですから……。おいしいの食べるの……幸せです。」

「また買ったら食わせてやるよ。生徒会室に來いよ。」

「え……。でも……。」

あのプリンは限定品だし、高そうだけど……。

「遠慮すんなよ。お前だけにはおごってやる。俺がいつて言ってるんだから素直にうなずいとけばいいんだよ。」

「じゃ、食べ行きます。」

やったあ、あのプリンがまた食べれるよ。

さらに上機嫌になった理麻は新たなたこ焼きを口に含む。ふと、頭にあったかい感覚があったのでふと視線を上げた。隼人の手が理麻の髪を梳すいていた。その感覚が心地よく、思わず理麻はその手にすり寄った。瞳をつぶって、微笑んでそうしている理麻はまるで猫のようだった。隼人は驚きの慣れた手つきで理麻の髪の毛をなでてい

る。

うあー・・・なんだろう・・・ふわふわしたような感じがするー・・・。なんだろう・・・落ち着くっていうのかなあ・・・。頭なでなでしてもらうの久しぶりだなあ。

「・・・おでんも食うか？」

「え・・・？」

「どうせそんなじゃ足りねーんだろ。大根はおれ食うけどそれ以外は食っていいから。」

「あ・・・ありがとうございます。」

理麻の頭から手を離れた隼人は、おでんの容器から大根を抜くと、残りをすべて理麻のほうによこした。たこ焼きをちょうど食べ終わった理麻は、さっそくふわふわ白はんぺんに手を伸ばした。がぶつと食いついたところで、その場に玲治が現れた。

「理麻、お前は店をほったらかしてこんなとこで何してんのかなあ？」

「れ・・・れいじ・・・。」

あう・・・めったに怒らない（理麻には）、玲治が怒ってるよあ・・・。うええええ・・・。

「ごめんなさい・・・。あのお店は・・・？」

「もう交代の人、来たからいいってさ。紫音はもう海行つたぞ？俺探しに来たんだけど・・・。！・・・き・・・生徒会長？」

「よう、こんなとこで会うとはな。真昼間から会つのは初めてか？」

「こんなとこで会いたくなかった。」

「俺も同じに決まってるだろ。おい、ちょっと面かせよ。」

「いやだと言ったら？」

「別に此处でもいいんだぜ？いろいろな話してもなあ？」

その隼人の言葉に、玲治ははんぺんをハムハムしている理麻をちらりと見た。

「わかった・・・裏手でいいだろ？理麻、お前どうせ此处で食ってるんだろ？俺生徒会長と少し話あつから、満足するまで食つてな。話し終わったら迎えに来るからな。」

「ん・・・わかった。」

玲治と隼人が休憩スペースから立ち去った。理麻は一人おでんを食べ進める。とそこにまたしても誰かが来たのだった。

「あれー、隼人が理麻ちゃんになってるー。」

「会長どこ行ったんですかあ？」

「副会長さん・・・に、悠吾君？」

まだまだ夏は終わらない・・・

僕・理麻「なでなで・・・」(後書き)

いつになったら夏って終わるんですかつ!!

隼人が理麻に甘すぎる・・・甘すぎる・・・

まあ、それにはある理由があるんです。まだいえませんが・・・

俺様生徒会長消えた・・・彰もキャラ違ってきてて・・・今度は

隼人・・・orz

俺・理麻「さて、帰るか」(前書き)

いい加減に夏休みを終えましょう。

そして新学期に移りましょう。

というわけで、最後にびしっとしめてください、閃夜さんw

俺・理麻「さて、帰るか」

海の家休憩スペースにいた理麻のところに、副会長の歩と、書記兼会計の悠吾が現れた。二人は理麻のいる机まで来るとその向かい側に腰を下ろした。二人とも泳いでいたのか、髪からしずくが落ちていて肩にはタオルをかけている。

「ね、会長は？」

「えと……ちょっとお話してくるそうです……」

「誰とー？」

「僕の……友達とです……」

「理麻の友達？ふーん……」

「あつはは、隼人このかき氷食べたんだー！やっぱ俺の思った通り、隼斗こういうの好きそうだからねー」

「そんなわけないでしょうに……。でも意外に平らげてる……」

すでにあの奇妙というか、この世のものとは思えないようなかき氷はなくなっていた。文句を言いつつも隼人が食べたのだ。

「アーアーもうすぐ夏休みも終わっちゃうよねー。心行くまで寝てられなくなるよー」

「先輩の場合、生徒会室でいやというほど寝てるじゃないですか。そのたびに会長の額に青筋浮かんでるの知ってます？」

「あつはは、それはいつものことでしょうに」

「あ……あの……」

「どうかしたの理麻ちゃん」

「僕、ゴミ捨ててきます……」

「一緒に行こうか？」

「え……だ……大丈夫だよ……これくらい……」

「理麻ちゃん迷子になったら迷子センターに行くんだよ。あ、呼び出すのは隼人に見てみたら？」

「そんなことしたらまた会長の額に青筋浮かぶじゃないですか。」

「ま…迷子になんて…なりません…」

食べ終わった容器を持って理麻は海の家にあるゴミ箱へと向かった。ゴミ箱に無事ゴミを捨てて、休憩スペースに戻ろうとした時だった。玲治と隼人の会話が聞こえてきてしまった。

『むかつくんだよ…あの篠宮の顔を見てると』

「え……」

むかつくってどういうこと……僕…会長さんに何かしたのかな……

『まるで責められてるかのように思えてな。そしてそれ以上に憎たらしくて仕方ねーんだよ。たとえあいつとは赤の他人だとしても、俺は篠宮をそれこそ殺したくなるほどな』

そう言い放った隼人の表情は理麻はうかがうことはできない。だが、その言葉の声があまりにも低いものだったので、理麻は恐怖で青ざめた。それと同時に胸が痛く、息が苦しくなってくる。頭の片隅で、誰かが繰り返し叫んでいる。

『お前ら全員殺してやる——』

「いつ……たい……頭……割れそう……ッ……!!?」

強く閉ざした瞼の裏に火花が散り、頭に走る激痛により、理麻は意識を手放した。

「はあっ……はあっ……またかよ……」

意識を手放した理麻だったが、その場に倒れ込むことはなかった。再び立ち上がった時、頭の痛みも息苦しさもなくなっていた。そして、そこにいた理麻は口調も雰囲気も変わっていた。短く舌打ちしたその理麻は、その声ができるほうへと歩いて行った。

「楽しそうな話してんじゃねーか。俺も入れるよ？」

「り……閃夜……？」

「お前……」

「俺を殺すって？殺してみろよ。でも、俺はお前に殺されるような理由を作った覚えはねーんだけどな」

「お前にはなくても、この世に実際に存在するんだ。俺がお前を憎む理由って奴がな」

「へえ、聞かせろよ」

「お前に話す気はない」

「殺される理由くらい知りたいもんだぜ？」

「勝手にほざいてろ……」

そういうと、隼人はそのまま踵を返してどこかへと去っていった。しまった。

「相変わらずつまんねーやつ。なにあれ、もう片っぱの俺とずいぶん扱い違うじゃねーか。同じなのに差別とかひどくね？」

「閃夜……お前いつ……」

「今さっき勝手にくたばりやがってチェンジしただけだし。相変わらず心よわよわな俺だなあ」

くくくつと笑う理麻。その横にいる玲治は浮かない表情を浮かべている。

「つか、やつぱ昼間は暑いな……俺やつぱ夜のほうが好きだわ。つ
—ことであとよろしく」

「え……は……？ちよ……！！？」

いきなりかくりと崩れた理麻をあわてて抱えて支えた玲治。どうやら閃夜は再び理麻へと変わったようだった。少しして理麻は意識を取り戻す。

「あれ……玲治……？」

「大丈夫か理麻？」

「ん……僕何してたっけ……ゴミ捨てて……それで……知らない
うちに倒れちゃったのかなあ？」

「だろうな。暑いから無理すんなよ。どうする、泳ぎに行くか？」

「せっかく海来たから行く。浮き輪……」

「海の家で借りればいいって紫音が言ってたな」

「浮き輪浮き輪——」

浮き輪でぶかぶかしながら、理麻は先ほどの隼人の言葉を思い返していた。あの時玲治にはわざと呆けて覚えてないように装ったが実はしっかりと倒れる前のことは覚えていた。

新たに生まれた不安と疑問とともに、理麻の夏休みは終わって
いた——

俺・理麻「さて、帰るか」（後書き）

理麻と隼人の関係？にもいろいろありますね。

徐々に明かしていききたいと思います。

隼人はヤンデレとかではないと思います。というか作者がヤンデレって何？って感じなので、ひょっとしたら知らぬ間にそう取れる感じになってしまってるかもしれませんが・・・少なくとも殺したいほど好きとかじゃないです。というか、隼人は理麻のこと好きなのかさえ私もわかりませんw↑

次回から新学期に入ります。

俺・理麻「おいおい……」(前書き)

今日から新章突入です。

俺・理麻「おいおい……」

真っ赤だ。清々しいほどの赤。さっきまで暖かった赤。でも今は冷たく冷え切った赤。赤……。赤……。ここは僕の家。みんなみんな動かない。寝てるんだ。永遠に。永久に続く眠りについて。でも僕を見つめてる。光り燈さぬその瞳で。僕だけ起きて、驚いてる。なぜって……。わかったから。

みんな死んだんだ――――

あの日から僕は二人になった。

いつもと変わらぬ朝。なのにどこか違和感がある。なんで朝日を浴びているのかがわからない。

「なんで朝からチェンジしてんだ……」

ベッドの上で胡座をかいて座り込む。一人称が“俺”の理麻。滅多にこんなことはないのだが、今日は朝からチェンジしていた。しかも――

「変わ……れないだと？おい、どうなってやがる！！」

おかしい。特に変わったことはなかったはずだ。昨日の始業式だって、なんのかわりもなかったじゃねーか。なのになんで変わってんだ、意味分かんねーよ俺

「とりあえず落ち着くか……今に変わるだろ。めんどくせえ、朝からなんで俺が……」

とかなんとか言いつつ、理麻は制服へと着替える。校則をきちんとして守ったいつもとは違い、ワイシャツをズボンから出したという恰好である。そしてそのままリビングスペースへと出る。そこには意外にも彰がいた。理麻のいつもと違う恰好に彰でさえ驚きを隠せないようだった。

「……んだよ、ガン飛ばしてくんな」

「……閃夜か？」

「なよなよ理麻に見えるか？あ、お前の目は節穴だったな。」

「んなわけねーだろ」

つーか、何故朝から彰と話さなきゃいけないんだよ。一応敵対してるんだよな俺ら……あれ、そう思ってるの俺だけとかじゃないよな。

そう思った理麻は、ポケットに忍ばせていたいつもあまり使われなくて、フル充電された携帯を取り出した。そして幼なじみと呼び出す。コールが三回鳴る前にでたから起きていたらしい。と、思っ

たがその声は今起こされました感満載だ。

「も……もしもし……理麻？」

「俺だけど、25秒以内に部屋まで来い。以上。」

「え……ちょ……《ブチッ》」

よし、恐らく無理だ。たとえ青虫野郎（彰）がお前なあ……見た
いな視線送ってきててもスルーだ。

なぜかって？

俺さ今、すっげえ機嫌悪いの。ただそれだけ。朝とかまじ無理だし。

俺・理麻「おいおい……」(後書き)

さてこれからどうなるんですかね？

俺・理麻「お前ら俺をなめてるだろ？」（前書き）

俺理麻。

書いてて楽です。

口調もそうですし、はきはきしてるので、動かしやすいです。

俺・理麻「お前ら俺をなめてるだろ？」

チクシヨウ。間に合うなんておかしいだろ。ジャージで寝てるのかよ、卑怯者め。

「なんで朝から睨まれなきゃいけないんだ？」

「お前が悪いからに決まってるんだろ？馬鹿」

俺なんか……俺なんか水玉模様のパジャマだぞ！ドットなんて女のだろ！しかも水色とか青ならまだ男でも通用するけど、オレンジって、もはやいうまでもないだろ。あの母親の趣味だな。

「で、なんでまた閃夜になっちゃってんの？」

「知るか！しかも戻れねーし……」

「いつ戻んのも……」

「わかるわけがない！」

「お前ら……なにわけわかんないこと言ってるんだ？」

そつえば、こいつに理麻「閃夜とはばれたが、二重人格とまでは言ってなかったな。くそう、説明しなきゃいけないのか？めんどくさっ！よし、今からでも遅くないよな……」。

「な……なにいつてるの？仙道君？」

「……………」

「……………」

おい、二人して黙るなよ。そして、青虫。文句があるならはつきり言え。黙るな。今の俺の精一杯の笑顔だったんだぞ。なよなよ理

麻だったら、もつとかわいくだか何だかできたんだろうが、俺にはあれが限界なんだよ。なにが『仙道君』だ。鳥肌立ったわ。そして玲治お前もかつ！お前一応俺の幼馴染だよな？そして副リーダーだよな？そこは何かフォローするとかないのか！泣くぞ？もう、閃夜だろうが、理麻だろうが、構わず泣いちゃうからな！……やっぱやめた！泣くとまた何かかわいそうなものを見る目で青虫に見られそうだ。

「もういい……勝手にどうとでも解釈してくれ。俺は学校行くからな」

「せ……理麻、朝ご飯は？」

「だから俺は食わない……」

きゅるるるるるるる

「なっ！！？」

「腹減ってんじゃないか」

そんな馬鹿な！？俺のときは一回も今までなかったことないぞ腹のおとなんか。どういうことだ。

ほんとに俺はどうしちゃったんだ！？

俺・理麻「人の話を聞けって習わなかったのか!」 (前書き)

俺理麻が楽しい。

僕理麻の出番はもう少し後になりそうです。

俺・理麻「人の話を聞けって習わなかったのか!」

教室にいつも通り入るが、やはり違和感を感じたクラスメイトがこつちを見てくる。そりゃそうだ。180度違うんだ。俺だって、昨日と今日で全然印象違う奴来たら思わず二度見すると思うからなあー、やっぱこの席やだわ。前はともかく横がな。なにが楽しくて青虫の隣の席にいなきゃなんないんだ。俺にとつちや教室の最前列。教壇の真ん前よりも、最悪な席なんだぞ。

「席替えしないのかよ……」

「もうすぐするはずだけどな」

前の席にいる玲治が言う。もうすぐより今すぐがいい。もう最前列でもかまわない。この青虫から離れられるのなら。

「あ……でも運動会終わるまでは無理か」

「う……運動会だと!? だる……」

「今の理麻なら楽勝だろ?」

「そりゃそうだけど……まさかあんにやろー、運動会嫌で拒否ってんじゃない」

「理麻にとっては地獄だもんな」

やばい。あいつを無性に殴りたい。自分だけど。でも殴りたい。でも出来ない……。よし!

「千堂くん、一発殴らせて?」

「ざけんな、死ね」

「ちっ」

駄目か。満面の笑みでも駄目か。つかお前何不良なのに、こんな朝早いんだ。朝のHRでるなんて実は真面目くんなのか。

「おはよー理麻ー!!」

「げっ、ふぎゅっ!!」

「せ……理麻!!」

井上。その癖を治せ。ああ殴りたい。けど今後のためには我慢我慢。よし、明日は早起きして寝てる青虫に踵落しくれてやる。

「ま、お前の寝起きの悪さじゃ無理だな」

「ちょ、待て。何故今お……僕の考えてることがわかった」

「なんとなく」

あーあーあーあーあーあーム力つく!!!!!!

「ほらー席ついてー! HR始めるよー!」

担任の橘がやってきた。相変わらずのちびだな。俺はちびじゃない。成長が遅いだけで、今に玲治だって抜かしてやるんだ。

「じゃ、運動会の種目とか決めるからねー! でもその前にそれを決める運動会実行委員を決めまーす! て、事で篠宮君とー、一之瀬君に決定ー」

ちよと待て待て! 何だ今のは! なに独り言からの勝手に任命してんだ! 見る、普段それこそなんかあってもとりあえず落ち着いてる玲治まで思わず椅子から転げ落ちそうになってるぞ!!

「先生。俺はともかくなんでまた理麻を?」

「んー、なんとなくー？」

なんとなくー？じゃないだろうが！教師失格だぞお前！まず人の意見を聞くとか……こらあ！黒板に勝手に名前を書くな！そして花丸を書くな！何が上手に描けたーだ！誰もほめてねーだろうが！！

「あの担任、あんなだったか？」

「あー見えて素は腹黒いからな」

「まじでか！？」

「めんどいよなー」

「なんで俺がこんな目に……」

すみません、理麻さん。もうへなちょことかなよなよとか言いません。言いませんから、どうかかわっていただけませんか！？もうおれ死にそうです。

俺・理麻「人の話を聞けって習わなかったのか!」(後書き)

橘先生?

あれ、こんなキャラではなかったはず。

久々に描いたので、よくわからなくなってます。

これじゃあ、寮長とか、保健室のあの先生とか、最近出てこないキャラは多分同じような感じだろう。つまり自分のキャラなのによくわからなくなっているってことです。

俺・理麻「飲めなくはない」(前書き)

先に謝ります。

今回あきれるほど短いと思います。

いいかげん、運動会当日にしたいです。

俺・理麻「飲めなくはない」

運動会は学年を縦でチームわけしてるようだ。つまりF組まであるから6チーム対抗になるわけだ。各種目の順位で点数がもらえる。一位なら5点。それから一つずつ下がって、六位は0点となる。最終的に合計点の一番多いチームが優勝だ。

「つか、運動会ってさ、なんのためにやるんだ？」

「それ言っちゃ終わりですよ理麻さん。青春の思い出作りの為だろうに」

「優勝したら旗とカップってさ、結局俺らはなんももらえないに等しいわけだ」

「一応、授業の一環だから。って、ただ運動会の悪口言いたいだけですな、理麻さん」

「だってさ……」

なにが楽しくて、一日体育をしなきゃなんないんだよ！！俺は別に体育苦手じゃないけど、そこまで好きでも無いんだぞ！！

「大玉ころがしとかないの？」

「なんで？」

「手が滑ったとかで会長に突っ込んだりできるじゃん？」

「やめて、なんか乱闘になりそう」

「あれ、鉢巻き3人分足りねーぞ？」

「おっかしーな」

「足りないときは生徒会に言いに行かなきゃなんねーんだっけ？」

「そうそう」

「んじゃ、俺言ってきたやる」

「とか言っつてそのまま帰る気じゃないですか理麻さん」

「んなわけねーだろ。それに寮に戻ったって、どうせお前が部屋に来ちゃ逃げれねーだろ。行くついでに何か飲み物かってきてやるよ」

「コーヒーな」

「ブラックでいいんだろ？」

「理麻はジュースか？」

「お……俺だつてブラックくらい飲めるっつの」

「どうだろうねー」

「おい」

あいつ最近、俺をおちよくつてないか？あれ、俺ってリーダーだよな。閃夜だよな。

あれか、最近暴れてないからかな。あー今度青虫にでも喧嘩売ってやろうかな。

うん、そうしよう。

とりあえず今ははちまきだな。

俺・理麻「スマイル0円とかあり得ない。俺なら金取る」(前書き)

僕理麻が書きたい衝動が出てきましたが、もうちょっと先になるんですよね。

でも自分的には俺っ子のほうが書きやすいんですよ。

でもぼくっ子も描きたい。

どうしようもないですね。あはは……

恋愛観丸つきりなしでいつもすみません。

これじゃボーイズライフだ。ラブにせねば……

だからちよつとがんばってみました。

俺・理麻「スマイル0円とかあり得ない。俺なら金取る」

生徒会室にはなんなくたどり着く。だがここで、理麻はふと思いつく。今俺は俺なんだと。この生徒会には敵対する族の副リーダーと幹部がいる。もしここで自分が『閃夜』であると思われたらどうなるか。答えは修羅場と化すに決まっている。たとえ2対1になろうが、負ける気はないが……。だがそうになると後のことがめんどくさくなり、もし戻って僕のほうの理麻になったときに襲われでもしたら……。

「ぜってーばれたくない……」

そう心にかく決め、深呼吸を一度だけ大きく深くする。そしてここから演技派(?)理麻の腕の見せ所である。やや控えめにドアをノックする。中からは一人の人物の返事が聞こえてくる。その声にやや額の筋をびくびくさせつつ、理麻は中に入る。笑顔笑顔。スマイル0円。……いや、あいつからなら金取る。極上の笑顔してやるから金よこせ。

「しつ……れ……します……あの……」

「なんだ、お前か」

ぎゃあああああ!!生徒会長一人しかない!!なぜだ!俺的にはあの族とは何のかかわりもない、副会長がよかったのに!なぜに会長!?めっちゃ帰りたい。でもこらえるんだ、理麻。運動会実行委員だろう!って……そもそもそれになりたかったわけじゃないんだよな。にしても、お前呼ばわりすんじゃないよこの黄金虫^{こがねむし}が。仙道が青虫ならお前は黄金虫で十分だ。ふははははは!

「どうかしたのか？……そういえばお前、運動会実行委員になったんだってな。そういうの苦手じゃねーのか？」

「せ…… sense に無理やり……」

「ああ、橘はそういうところあるからな。ということは運動会関係か？」

「僕のクラスのはちまき……足りなくて」

「はちまきか。ならこの名簿にクラスと足りない数を書いてくれ。当日までに用意させてクラスにもってかせる」

ちよつと待て。さつきから用意させるだの、持っていさせるだの。お前なあ……。お前が持つてこい。えーっと、ペン……ペン……。

「……はい、書けました……じゃ、お願いします……失礼しました

……」

「なんだもう帰るのか」

「はい……まだやらなきゃいけないこと……あるので……」

「もう6時だぞ？」

「でも……その……」

察しろ——！！お前と一秒でも長く同じ空間にいたくないんです——！！って言いたい。なんなのこいつ。俺にいてほしいの？え？いや、正確には『僕』のほうの俺だけど。なんだって、俺とあいつの扱いこんな違うんだよ！いや、別にいいんだけどさ。

「どうかしたのか？」

「えっ……」

ちょ……近い近い近い！！いつの間に目の前にいるんだ！？

「なんか思いつめてるような顔してねーか？」

「し……してない……」

「そうか？」

「してない……ですから……」

だからのぞきこんでくるのやめてくれっ！顔近いつて言っ
言っではないけど、思ってるから！

「篠宮……」

「僕、用事終わったんでこれで帰ります！さようなら……」

こういうときは逃げるが勝ちだ！さっさとブラックコーヒーとジ
ュ……ジュース買って帰るぞ！！

俺・理麻「スマイル0円とかあり得ない。俺なら金取る」(後書き)

うん、どこ頑張ったのか言ってみろ。

すみませんごめんなさい。

ほんとにキスさせるかとも思いましたが、やめました。

何となくここでキスするのはおかしいかと……

頑張れずにすみません。でもあきらめてはないし、せっかくR15

指定にしているので、頑張ろうかと思えます。言うのは簡単ですね。

s i d e ? 「取り戻せねーんだよ」 (前書き)

珍しく、今回理麻君ごっちもでてきません。

side? 「取り戻せねーんだよ」

篠宮が去った後、隼人は何気なく生徒会室の窓に近づき、背を預けて外を見た。

「いつまで隠れてるつもりだデメエは」

「一応空気読んでたんすけど?」

生徒会室と内側からつながっている、生徒会準備室ものおきから出てきたのは、生徒会書記兼会計の悠吾だった。

「あれが、『閃夜』ね」

「お前は気付いてたんだろ?」

「あ、ばれてたんすか? あの海のとくにあったのが初めてだったんすけどね。すぐに、ああ俺らとおんなじ匂いがするなって思ったんすけど…… まっさかあの『閃夜』だとは思わなかったすよ。つか、会長は今知ったんですか?」

「あんまり『閃夜』とは面識ねーからな。もっばら『閃夜』はあいとだし。俺は『皐月』が相手だったしな」

「って、なんでさっきチャンスだったのに殴るなりけるなりしなかったんすか?」

「……」

「ずっと探してたんすよね? 俺にも情報を負わせて、仙道にリーダーの座を譲ってまで会長は……」

「戸惑ってんですよね? あまりにも似すぎてるから」

がらっと、生徒会室のドアが開き、入ってきたのは彰だった。

「仙道……」

「あいつ、確かにそっくりですね。沙那に」

「……」

「沙那って誰ですか？」

「お前は知らなくていいんだよ。仙道、おまえ、あいつが『閃夜』だって知ってたな？」

「まあ、同室ですしね」

「なぜ俺にすぐ伝えにこねーんだ？俺があいつのこと探してると知らないわけではないだろ？」

「あなたがリーダーなら、一応報告義務があつたんでしようが。そうじゃない今、そんなこといちいちたえるわけないでしょう？見つけたら報告してくれとは言われてない」

「お前……」

「それに、あの出来事は紗奈にも責任があるんじゃないんですか？あれじゃあ、俺だってわかんなかったですしね」

「それでも俺は……あいつだけは許せない。『閃夜』さえいなければあいつは今頃……」

隼人の顔が次第に歪んでいく。こぶしを固く握りしめ、力強く歯をかみしめる。あの時の出来事はいまだに彼の中にひどい罪悪感と後悔と憎しみを抱かせていた。

「あなたはどうしたいんですか？『閃夜』を葬りたいのか……それとも……」

「そんな俺の勝手だ。お前は口出しすんじゃないよ」

そう言つて、隼人は生徒会室から出て行つた。

「そついえば、俺会長がなんであんなに『閃夜』を探してるかしらねー……」

「しらねーほうがいい……」
「はあ？」

複雑だろう……恨みの対象と、最愛の人の面影がある人間が同一人物なのは……

s i d e ? 「取り戻せねーんだよ」 (後書き)

久々に書くとそのキャラの口調とかよくわかんなくなります。

特に悠吾。もうわけわからない。

俺・理麻「これほど異様な光景もない」(前書き)

私が通った学校は大体これがつきものだったんですけど・・・
全国共通なんでしょうか。

これをはたから見たら絶対異様としか思えません・・・

俺・理麻「これほど異様な光景もない」

校庭に垂れ下がる国旗が、やや涼しい風になびく。朝から数発の花火が打ち上がる。色とりどりの鉢巻きが、ざっと校庭を埋め尽くしていた。いよいよ運動会の始まりである。

「なにが楽しくて一番前……」

ジャージ姿の理麻は、面白がる様子もなく、クラスの一番前に立っていた。少しサイズが大きいのか、袖やズボンの裾に余りがあるのが気にかかる。いや、気にしたくは無いのだが、隣に玲治が立つとさらにそのコンプレックスが際立つ。

「お前、横に立つなよ……」

「仕方ないだろ。俺も実行委員なんだし」

「ムカつく……」

「これは生れつきだから……」

「お前じゃなくて、あいつ」

そういつて理麻が指を指し示す。そこにいたのはまばゆい金髪の黄金虫……もとい、生徒会長である。

「ジャージに余りが無い……」

「ムカつく対象、なんか違うかい？」

「違うくない……」

この間にも運動会は着々と進められていた。校長の話から、今まで顔も知らなかった……というか、興味のかけらも無い来賓の話。

運動会のルール説明。それが終わると準備体操でそのあと第一種目の50m走である。そして準備体操。校庭に流れて来たのは、あの朝6時半からラジオから聞こえるピアノの伴奏である。よく小学生が夏休み頑張って早起きしていく、あの体操だ。

「ラジオ体操とか、何年ぶり……つか、この学校金持ち学校だよな……」

「いろんな企業の坊ちゃん達がラジオ体操やっているとかつけるよな」
「お前もだろ」

「理麻の家には敵わねーよ」
「そうか？」

体操が終わり、それぞれのクラスの応援席に戻る。

「そういえば、理麻はなんの種目に出るんだ？」
「それを聞くんじゃないよ」
「は？」

なんだって俺が2種目も出ないといけねーんだよ。

「理麻、一緒にがんばろーな！」
「あ……うん……」

そうだな、とりあえず俺をあの種目に勝手にエントリーさせた井上は殴っていいよな。それから、お前が今座ってるの俺の椅子だから。頑張って教室から運んできたんだぞ。お前の椅子はその隣だろう。俺の椅子の下に目印としてスポーツドリンク置いてあるんだよ。だからそこどけ。やめろ、抱きつくなあああああああああ！！

俺・理麻「これほど異様な光景もない」(後書き)

次回はいいよ種目で奮闘する理麻ですね。

俺・理麻「借りたいものは案外身近にあった」(前書き)

うーん。

こつこつ総受けて、一応なんか決着というか、誰かとくつつけるべきなんですかね・・・

このままじゃあ、誰ともくつつかないで終わるフラグがたってますが・・・

私としては玲治が隼人がいいんですが…描きやすいからです。

彰は……がんばればできそうですけど、今のままじゃ無理っぽいですし。

歩とかはね……………最近出番ないですし

どうなるのか……私にはたしてどうするのか……

だれもしらない…………orz

俺・理麻「借りたいものは案外身近にあった」

理麻が出る2種目のうち、一つ目の種目が始まった。

走る順番になるまで、列に並んで待つ。秋晴れの空に、合図のピストルの音が高らかに鳴り響く。一斉に走り出す走者達。彼等の目指すその先の地面には、なにかが書かれているカードが、裏返しておいてある。彼等はそれを一枚取り辺りを見回して何かを捜し求める。見つかったらそれを借りてゴールへと走るのだ。

「借り物競争……か」

「何が書いてあるんだろうな！」

知るか！！だがそんなに難しいものではないはずだ。このグラウンドにあるであろうものだろう。じゃなきゃ、一生終わらないぞ。

で、来ちゃったよ。順番が！！まあ足の早さがどーの、っていう競技じゃないわけだからみんな最初のダッシュは軽く……ないね！全力疾走かお前等！！そりゃそうか、カードに早く着いた方がいいもんね。納得した。さて、俺は何を借りる羽目になるんだ？

「あ……青いものだと？」

おいおい、なにこのアバウトさ。青けりやいいわけ？ていうか、意外とムズいもんひいちゃったな。青いものってなんだ？ああ、それなら近くにあるじゃないか、ほらあの有名な言葉『地球は青かった』……何考えてるんだろ……馬鹿だ俺。さて、気を取り直して青いものを探すか……。まだ他の奴らも探し中だし。青青青青……。俺はふらふらと観客席や、クラすの応援席を眺めた。

「やっぱ青いもんなんかそうそう……あ、あつたあ！！」

奇跡だな。まさかこれほど青いものも無いだろう。
そう思っただけ俺は水道に向かって走った。そしてそこで水分補給し
ている青虫の腕を掴む。

「は？」

「お前始めて役に立つって思ったわ！」

「意味わかんねー事言っただけ……ってどこ行く気だ！？」
「どこって……」

そりゃ、ゴールだろ。ほかにどこがあるんだ馬鹿め。

で、見事ゴール！！まさかの2位だけだな。

「お前が目立つとこにいないから……」

「俺のせいじゃねーだろ。つか、なんて書いてあんだよ」
「青いもの」

「おれのどこが青い」

「いや、青い髪の毛なんかそうそういねーし。たまには役に立つな」
「デメエ、まじシバくぞ」

「やってみ、負けるわけねーし……あだっ！？」

話してて前方不注意だったからだろうか。理麻は校庭の隅にある
段差に足をとられて、盛大に転んでしまった。しかも顔面が地面に
直撃してである。

「ぶ……なにやってんだどんくせー奴。……篠宮？」

「いたたた……ふえ？仙道……くん？」

「……篠宮……」

「な……なに？」

「んなことありか？」

「え？え？僕なにかした？」

「しるか……」

彰はそのまま理麻を放置して、立ち去った。残された理麻はしばらくわけがわからず、その場にいるしかなかった。

俺・理麻「借りたいものは案外身近にあった」(後書き)

ということ、もどつて？きた僕理麻君。

次の種目は僕理麻君が活躍・・・できるんでしょうか・・・

そもそも自分のクラスのところまで戻れるんですかね？

本部の放送で、迷子のお知らせです。みたいになつたらおもしろそうですけど

僕・理麻「そんなに高いの無理だよ……」（前書き）

運動会はいつ終わるんですかね。

おわったら、いよいよ終わりに向けて突っ走りたいんですが……

僕・理麻「そんなに高いの無理だよ……」

あたりを見回して、その場の雰囲気などから今運動会の真つ最中であるということを理解できた理麻。何とか玲治や紫音がいる自分のクラスの応援席に戻ってきた。

「玲治……あのさ……何でもう運動会してるの？」

がたっ……がたたたたっ！

「いつてえ……って、理麻!？」

「え、何？僕何かした？」

「戻ってるし……」

「え？え？」

「いや、なんでもないこつちの話。で、この次の競技に理麻でるか
らな」

「え？な……なんで？僕運動音痴だよ？」

「音痴だろうがなんだろうが出なきゃいけないんだよ。ほら、出場
選手は入場口集合だつてさ。悠が一緒だし、行ってこいよ。それが
終われば昼だからさ」

「ご飯！いつてきまーす！」

「げんきんな奴……」

応援席付近にいた悠とともに、理麻はゲートに向かった。

「ね、何の競技……だっけ？」

「あはは、覚えてない？パン食い競争だよ」

「パ……パン食い競争？」

それってあれ？なんかこうぶら下がったパンをジャンプしてぱくくんでそれでゴールするあれ？

「パンはうちの食堂特製パンだって。あそこのふわふわでおいしいよね」

「おいしいけど……届かないよ……」

玲治に前それってお前ジャンプしてるって言えないぞって言われるほど、僕はジャンプ力がないみたいだし。でも、おなかすいたし……パン食べたいし……でも高いよね……僕だけ低い棒に吊り下げてくれないかなあ……。

「あれー、理麻ちゃんだー。やつほお！」

「ふ……副会長さん……こんにちは？」

「えー、何で副会長って呼ぶのー？しかもさん付けー？」

だ……だめかなあ？だって会長さんも会長さんって呼んでるし、それにじゃあほかになんて呼んだらいいかわからないし……。

「歩でいいよ」

「歩……先輩？」

「理麻ちゃん首かしげるのは反則だよ」

「え？え？」

「理麻、僕あっちいつてるからごゆっくりー！」

「え？悠君……」

まってえ。僕も行くから！一人じゃ限界だよお！！でも、一個聞きたいことあるんだよね、歩先輩に。

「あの……歩先輩……」

「なに？」

「どう……したんですか？……その……ほっぺ」

歩の頬には真っ白なシブが貼ってあった。理麻に言われて、あ
あと思いだしながら歩はそれを張ることになった理由を話した。

「隼人にさあ、さぼって寝てたところ見つかったちゃってさあ。あつは
は、そりやもうばこーんって、グーで殴ったんだよ。ひどいよねー」
「そ……ですか……」

というか、またさぼってたの？前も確かさぼってて、首絞められ
てなかったっけかなあ。にしても、やっぱり会長さん、怖いよ。グ
ーで殴るのは痛いからやめた方がいいと思うよ。

「理麻ちゃんパン食い出るの？」

「（こくん）」

「がんばれー！俺此处で応援してるから！」

「歩先輩は……審判ですか？」

「そう、ここで手とか使ってないかなーって見る役。隼人に勝手に
押し付けられたんだよー」

ひどいよねーとか言ってるけど、さぼらずに頑張ってください。

そして、いよいよパン食い競争理麻の順番となった。お世辞にも
早くはない速さ、でも理麻にとっては全力疾走なそんな速さで、パ
ンの下まで走る。そして思いっきりジャンプする。だが上手くいか
ず、ふわふわのパンが、ぽこぽこ頭に当たる。必死に口を開けてか
ぶりつこうとする。だが、まるで理麻をもてあそぶようにパンは頭
上をゆらゆらと揺れている。

むう……ゆらゆらしないでよ。食べれないじゃんか！えいっ！ほ
わっ！とおっ！

「はむっ！」

そして奇跡は起きた。まあ、ただ理麻がようやくパンを獲得した
だけだが。順位はもちろんビリだったが、理麻はパンが手に入って
ご満悦だった。

「よく取れたな、理麻」

「クリームパンがよかったな」

「欲言うなよ」

応援席でパンを食べつつ、そう愚痴をこぼす理麻だった。

僕・理麻「そんなに高いの無理だよ……」（後書き）

ところで、ほんとに誰を出しゃばらせるのかいまだに迷ってます。

玲治か、隼人。……彰も一応候補に入れてますが……

総受けにしたいと言って……でもだれかとくつつきたいという気持ちもあるのです。

それか、これはいったんラブコメで完結させて

それからまた別の連載でそれぞれたとえば玲治編……とか玲治ver.

（バージョン）とかにしようかなとも思ってますが……

それならそれでうまくいきそうですか……

どうでしょう……

意見とかくださるとうれしいです。

意見来なくても、ぼちぼち決めてきますが……

僕・理麻「どんな時も幸せ」

運動会の翌日。普通なら代休とか休みの日になってもいいのだが、あいにくそんなこともなく通常授業が行われていた。筋肉痛にやや悩まされつつ、理麻もまたいつもと変わらぬ日常を送っていた。そんな日の昼の光景。

「はい、ハヤシライス。それからこっちがB定食。それからナポリタンね。そしてかつ丼、オムライス、ドリアに月見うどん、お好み焼きですよ！」

まあ、最後のかつ丼からのメニューはすべて理麻のいの中に収まる予定だ。ちなみにこれでも少ない方だ。いつもならあと2品はあるだろう。そんな光景も玲治、紫音、悠にとってはもう日常だった。理麻の食欲は底なしといってもいい。今も玲治が頼んだB定食にある海老フライを狙っている。それをわかっているのか玲治も海老フライには手をつけない。どうせ最後にたどりつくのは理麻の胃袋だからだ。そして案の定、ドリアを食べ終わった理麻は素早い動きで海老フライを持って行った。食べている時の理麻は言葉に出さないが、とても笑顔で平らげていくのだ。周囲から見ればこれほどほほえましいことないだろう。

「いつけねー！俺、橘先生に呼び出しくらってたー！！」

「あ、僕も」

「呼び……だし？」

「次、校外授業でしょ？その準備だって。紫音と僕が頼まれちゃつてさ。悪いけど先言ってるね」

「大変だな」

「理麻！またあとでな！」
「うん、ばいばい」

だから、あの二人はハヤシライスとナポリタンという単品メニューを頼んでいたのだろう。そそくさと食べ終わり食堂から去って行った。紫音たちを見送った後また理麻は食事を再開した。

「美味しい？」

「うん、此処の御飯みんなおいしい」

「そか。いっぱい食えよ」

「うん！」

「ほら、もう一匹海老やるよ」

「え、いいの？だって玲治のだよ？」

「俺そんなに海老フライ好きじゃないからいい」

「そうなの？んじゃ遠慮なく」

そういつて、二匹あった海老フライは二匹とも理麻の胃袋に消えた。

放課後、理麻は校舎の最上階にある生徒会室にいた。そして眼の前にはあのカフェのプリンがある。パシラされた歩の後に付いていき、生徒会室に来たらこれがあつたのだ。

「ていうかさー、俺の分はー？」

「あ？何か言ったか？」

「聞いた理麻ちゃん。あーいうこと言うんだよ。ひどくない？」

「えと……」

「お前になんか誰が買ってくるか。少しは俺の役に立て役に」

「だから、理麻ちゃん呼んできたじゃん。隼人自分から行くの恥ずかしいからごぶっ！！？」

「ああ？何か言ったかって言ってたんだよ。で、なんか言ったか？」
「隼斗怖ーい」

そんな攻防？が繰り広げられている傍らで理麻は買ってきてもらったプリンをおいしそうにほおばっていた。

「理麻ちゃん、あーんして！」

「え、あーん？」

「そ、あーん！」

「はい、あーん」

「んあーあああああああああああ！！また隼人に食べられちゃったー！！」

「何度言えばわかる、お前に食わせるために買ったんじゃないんだよ」

はたから見れば、穏やかとは言えない生徒会室。でも、なぜか理麻はおびえず、平然とプリンを食べ続けていた。相変わらず、満面の笑みを浮かべて。

僕・理麻「どんな時も幸せ」(後書き)

おお、食べ物の話ばかり。

さて、今回突然ですが最終回です。↑

正確にはこの後にあとがきの何かを載せますが

これedyouやく恋愛版を書けます。

しばらく間はあると思いますが、必ず恋愛版は更新開始いたします。
また理麻やそれぞれのキャラをよろしく願います。

ラブコメ版を此処まで……

いえあとがきまでとっておきましょう……

あとがきです。

えっと、一応本編は終わってるんですが、一応お礼をこめまして
&私のBL作品の終わりにはいつもあとがきがあったのであとがき
です。（だから、暇な人だけお読みください）

では、「僕は理麻、俺も理麻」完結いたしました。といっても、
*ラブコメ版*がです。

いろいろ、行き当たりばったりで正直書きたいこともまだ色々あり
ます。が……

どうも私はコメディーに持って行ってしまい、BLと呼んでいいの
かどうかわからない作品になっていつてます。そういうの期待して
た方にはほんと申し訳ないです。

ですが、残念に思っているのは私も同じです。もう少し理麻と誰
でもいいので（よくはないかもしれないけど）いちゃこらさせたか
つたんですよ。それが、彰と隼人のキャラ崩壊（設定との違い）に
より、なんかそこから話が脱線というか、コメディーに走った原因
だと思えます。なので、この作品はこれで終わっただんですけど、ま
だ続きます。

新しく*恋愛版*として近日？（か、どうかは私のやる気次第です
が）連載始めたいと思います。

そうなったときはまたよろしくしてくれると嬉しいです。

恋愛版は一応

彰×理麻

隼人×理麻
玲治×理麻

だと思います。連載順も多分上の順番だと思います。そのほかで誰かとかくつつけてほしいとか、こんなシュチュエーションみたいなどリクエストありましたら、ご遠慮なくおよせください。一応上のは僕理麻が主体ですが、俺理麻でもみたいなど何でも構いませんし、紫音と悠が対象でも構いません。あと、最後のほう全く出番なかったので、おそらくないでしょうが寮長の清水先輩とか途中でキャラ変わった橘先生とか、保健室の先生（すみません、自分のキャラなのに名前わかりません↑）を登場させてほしいでも構いません。

では、これでいったん、「僕は理麻、俺も理麻*ラブコメ版*」は完結いたします。

また理麻たちが動き出すまで、しばしお別れです。

お気に入り、評価、アクセス、感想してくださった方々に心からの感謝を。

1、30

琉兎

2011、1

あとがきです。(後書き)

本当にありがとうございました！

*恋愛版*でまたお会いしましょう!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0375u/>

僕は理麻・俺も理麻*ラブコメ版*

2011年11月30日21時59分発行